

【翻 訳】

イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注(3)

亀谷 学・大塚 修・松本 隆志 訳注

本稿は西暦9世紀(ヒジュラ暦3世紀)の後半に著作活動を行ったイブン・ワーディフ・ヤアクービーの著書『歴史 *al-Ta'rikh*』の日本語訳注である¹。連載の第三回となる今回は、第一部・古代史部分のうち、モーセ死後の古代イスラエルの民によるパレスチナへの進攻、定着からサウルとダビデの王権の物語に至る記述の訳注と、当該部分についての解説となる。なお、今回の日本語訳注部分については亀谷が元となる原稿の作成を担当したが、それらはすべてメンバー三人による検討、議論を経た成果である。

〈今回の翻訳部分の解説〉

本号に掲載する翻訳は、第一回、第二回に引き続き、いわゆる『旧約聖書』に遡る情報を基盤とする記述であり、今回はモーセ死後の古代イスラエルの民によるパレスチナへの進攻、定着からサウルとダビデの王権の物語に至る部分の記述となる。これらは、『旧約聖書』の「ヨシュア記」「士師記」「サムエル記(上・下)」、そして「列王記」の冒頭までの内容にわたる。

ヤアクービーのテキストのこの部分は、「モーセの後のイスラエルの民の預言者たちと王たち」「ダビデ」の二部分に分けられているが、これはサウルが死亡し、ダビデが王位に就いたところで分割されている。これは概ね『旧約聖書』の「サムエル記上」と「サムエル記下」の間に対応している。

前半部分にあたる「モーセの後のイスラエルの民の預言者たちと王たち」もまた、大きく二つに分けられる。古代イスラエルの民を支配した様々な人々に関する簡略な記述と、サウルという強力な王が古代イスラエルの民を率いた時代の記述である。その内容は、①モーセの死後にヨシュアがその後を継ぎ、荒野を出たこと、②バルカの地での王バラクとの戦い、③イスラエルの民の墮落と

¹ 著者とその著作、写本と刊本、翻訳の状況などについては、亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー『歴史』訳注(1)」『人文社会科学論叢』(弘前大学人文社会科学部)8(2020), pp. 123-154にて述べたので、適宜参考とされたい(PDF版は弘前大学学術情報リポジトリ内の<http://hdl.handle.net/10129/00007041>からダウンロードすることができる)。

なお、以後この同訳注の第一回は「『歴史』訳注(1)」と略記し、第二回である亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー『歴史』訳注(2)」『人文社会科学論叢』(弘前大学人文社会科学部)10(2021), pp. 113-154は、「『歴史』訳注(2)」と略記する(同じく<http://hdl.handle.net/10129/00007395>からダウンロードすることができる)。

神の罰、④ヨシヤ死後のイスラエルの民を支配した人々、⑤預言者サムエルの登場とサウルの王位就任、⑥サウルによるアマレク人との戦いと神への背信、⑦サウルの変調とダビデの登場、⑧ダビデとゴリアテの戦い、⑨サウルによるダビデ殺害の試みとダビデの逃亡、⑩サムエルの死、⑪サウルの死、となっている。

その後、ダビデに関する記述が始まる。その内容は、①ダビデがユダの王となったことと、その時生まれたダビデの息子たち、②ダビデがエルサレムに入り、イスラエルの王となったことと、そこで生まれた彼の息子たち、③ダビデと異教徒の戦い、④ナタンの預言、⑤ダビデの戦い、⑥ダビデによるバト・シェバの略取、⑦ナタンの喩えと神の怒り、⑧ダビデの子の死とそれ以降の子の出生、⑨アブサロムの反乱と死、⑩ダビデに対する反乱とその時にダビデが神を称えた詩、⑪ダビデの人口調査と神の怒り、⑫アドニヤの反乱とソロモンの後継者への確定、⑬ダビデの遺言と死、である。

さて、本稿で翻訳した部分において最も問題となったのは、ヤアクービーのテキストには、現在の標準的なヘブライ語の『旧約聖書』とされる、いわゆる「マソラ本文」と異なる箇所があるということである。「『歴史』訳注(1)」、「『歴史』訳注(2)」においては、『宝の洞窟』の枠組みを軸とするほか、『クルアーン』やその他のアラビア半島由来の伝承を加えることで本文が作られていた。本稿で翻訳された部分についても、概ね『旧約聖書』の記述の抜粋をつなぎあわせることで成立していたが、特に固有名詞について、マソラ本文に基づく表記とは異なる場合がいくつか見られた。そこでヤアクービーのテキストの情報源となった可能性のある聖書テキストを比較し、マソラ本文とは異なる来源が想定できるものについて、以下の表にまとめた。

	採用テキスト 転写	『歴史』マンチェスター写本 (アラビア語)	マソラ本文 (ヘブライ語)	ベシッタ (シリア語)	七十人訳聖書 (ギリシア語)
エフド	Ahūr	أهور	エフド	Ahōr	アウド
アブドン	‘Akrān	عكران	アブドン	‘Aqrawn	アブドーン
ダルヤ	Dālūyā	دالوتا	キルアブ	Keleb	ダルーイア
アドニヤ①	Arniyā	أرنيا	アドニヤ	Adōniyā	オルニヤ
ソロモン①	Salāmān	سلامان	ソロモン	Shlīmōn	サラーマーン
アドニヤ②	Dūniyās	دونياس	アドニヤ	Adōniyā	オルニヤ
ソロモン②	Sulaymān	سليمان	ソロモン	Shlīmōn	サラーマーン

このように整理してみると、エフドとアブドンの記述が含まれる「士師記」部分についてはシリア語『ペシッタ』に特有の固有名が確認でき、「サムエル記」のダビデの息子の部分ではギリシア語『七十人訳聖書』の固有名詞が確認できる。このことは、ヤアクービー（あるいは彼がもととしたテキスト）が、この部分の『旧約聖書』情報について、複数の情報源をつなぎ合わせて作成したことを示しているように思われる。

さらに、同一の人物に関する表記が異なっている部分も存在する。ダビデの息子であるソロモンは、エルサレムで生まれたダビデの息子が列挙されている部分ではSalāmānと表記される²。一方で、ダビデがバト・シェバを妻とする逸話以降では、アラビア語で一般的な綴りであるSulaymānとして表記される³。前者は、明らかに『七十人訳聖書』における表記であるサラーマーンに由来するものであると考えられる。そのほかにも、アブサロム (Abāsālūm/Abīshālūm)、アドニヤ (Armiyā/Dūniyās) も、やはりダビデの息子として列挙されている部分と、その後の物語の中では、異なる表記が用いられている⁴。

『七十人訳聖書』の影響が見られる初めての例は、ダビデがサウルから逃亡した頃の記述に登場する「サリク」という地名である⁵。これはマソラ本文では「ハレット」とされている地名であり、アラビア語の写本のSāri‘は『七十人訳聖書』の「サリク」に由来する転写と考えられる。

このようなヤアクービーのテキスト内における固有名詞の揺れは、上述のように、ヤアクービーが異なる情報源をつなぎ合わせる形で彼の『旧約聖書』に基づく物語を再構成したことを示しているように思われるが、それについて考えるためには、『旧約聖書』情報が、当時どのように伝えられていたのかを確認しておく必要がある。

この翻訳において、『旧約聖書』情報を参照する際に基軸として扱っているテキストは、いわゆる「マソラ本文」テキストである。これは1008年にシリアで筆写されたというヘブライ語テキストを底本として作られた校訂版であり、現在『旧約聖書』のヘブライ語テキストと言った場合には、多くはこのテキストを指す。死海写本の中にも含まれた『旧約聖書』のヘブライ語テキストとの照合からもその大部分が古いテキストを伝えているとみなされている⁶。

『旧約聖書』に含まれるテキストは、一部を除いて、ヘブライ語で書かれたものが「原典」と考えられる。そしてこれらの『旧約聖書』テキストは様々な言語に翻訳されていった。『旧約聖書』テキストはヤアクービーが著述に用いたアラビア語にも訳されることになるが、ヤアクービーが一つの「アラビア語旧約聖書」に基づいて記述したとは考えにくい。ヤアクービーの『歴史』が『宝の洞窟』の情報を軸に「創世記」部分の叙述を行ったこと、また上述したような固有名詞の表記の来源が揺

² L: I, 54.

³ L: I, 56ff.

⁴ L: I, 53, 56およびL: I, 53, 60.

⁵ L: I, 52.

⁶ 長谷川修一『旧約聖書：〈戦い〉の書物』（慶應義塾大学出版会、2020年）、pp. 18–20.

れていることなどは、複数のテキストを参照し、それをつなぎ合わせて編集しながら叙述していることを示していると考えられるからである。

ヘブライ語以外にヤアクービーが依拠した翻訳テキストとして、その可能性が高いものはギリシア語聖書とシリア語聖書であろう。ヘブライ語テキストから最初に翻訳されたのはギリシア語であった。いわゆる『七十人訳聖書』は紀元前3世紀に、プトレマイオス朝治下のアレクサンドリアにおいて翻訳が始められたと言われる。当初は『モーセ五書』のみの翻訳が行われたが、紀元前2世紀の終わり頃までに『預言者の書』や『諸書』に含まれる文書が翻訳されていたと推定されている。このように、非常に古い段階で翻訳されたギリシア語の『七十人訳聖書』は、マソラ本文テキストよりも「原テキスト」に近いテキストを伝えている部分もあるとも言われる⁷。なお、『旧約聖書』のラテン語訳はギリシア語の『七十人訳聖書』に依拠して行われたが、ラテン語聖書がヤアクービーのテキストに影響した可能性は低いと考えられるため、その詳細は割愛する。

ギリシア語の次に古い『旧約聖書』の翻訳は、シリア語への翻訳、いわゆる『ペシッタ』である。『ペシッタ』についても、ヘブライ語から翻訳されたと考えられ、その大半の文書は西暦150年頃までには翻訳されていたとされる。また、ヘブライ語テキストから翻訳された『ペシッタ』のほかに、6世紀前半および7世紀初頭にそれぞれギリシア語訳から翻訳されたものがあり、さらに7世紀後半から8世紀初頭に活動したエデッサのヤコブによって、ギリシア語『旧約聖書』及び『ペシッタ』を基に、『旧約聖書』のいくつかの文書のシリア語訳の改訂が行われたという⁸。

このほか、アラビア語への翻訳より早い可能性があり、ヤアクービーのテキストの情報源となった可能性がある『旧約聖書』の翻訳としては、コプト語、アルメニア語、グルジア語、エチオピア語のものが挙げられる。このうちで、『旧約聖書』テキストの翻訳の時期が一定程度明確になっているのはアルメニア語訳だけのようだ。アルメニア語への聖書テキストの翻訳は5世紀前半には行われていたという⁹。

一方、アラビア語への『旧約聖書』テキストの翻訳がいつ行われたのかは現時点でははっきりとしない¹⁰。『モーセ五書』のアラビア語への翻訳について明確に言及している最も早い例は、イブン・クタイバ（西暦889年没）である。そこでは、「『モーセ五書』、『詩篇』、その他のすべての書が、すでにアラビア語に翻訳されている」と述べられているが、どの言語から翻訳されたかは述べられて

⁷ 土岐健治『七十人訳聖書入門』（教文館、2015年）、pp. 98–122.

⁸ 戸田聡「初期キリスト教と聖書翻訳」『古代キリスト教研究論集』（北海道大学出版会、2021年）、pp. 247–254.

⁹ 戸田聡「初期キリスト教と聖書翻訳」pp. 264–265.

¹⁰ 『新約聖書』、特に四福音書については、より早い時期に翻訳が行われていた。現存する四福音書の写本のアラビア語訳としては、聖カテリーナ修道院に所蔵されている859年に筆写されたという奥付のある写本が最も早いものであろう（S. Griffith, *The Bible in Arabic: The Scriptures of the “People of the Book” in the Language of Islam*, Princeton: Princeton University Press, 2013, p. 113）。もちろん様々な翻訳活動がそれより前に行われていたと考えられる。

いない¹¹。

現存する最も古い書写年代を持つ、まとまったアラビア語『旧約聖書』テキストは、シナイ半島の聖カテリーナ修道院に所蔵される写本 Sinai, Ms. Ar. 2 である。この写本には『モーセ五書』と『ダニエル書』が含まれており、写本末尾にヒジュラ暦328年（西暦939-940年）に書かれたと記されている。また、写本冒頭には、ヒジュラ暦372年ムハッラム月（西暦982年）に書かれた購入者の文章が書かれており、それによると、シナイの主教であったソロモン Ṣulmūn というその人物は、この書をダマスクスで購入したと述べている¹²。このシナイ写本の他に、Oxford, Bodleian Library, Ms. Hunt. 186 は11世紀頃と推定されている『モーセ五書』の写本であるが、シナイ写本とボドリアン写本とともに『ベシッタ』からの翻訳であると推定されている。

ヴォラントによると、『ベシッタ』からアラビア語への翻訳と考えられるものについても、三つの分類をすることが可能であるという。第一は『クルアーン』の語彙を用いるという特徴があり、第二は型通りに『ベシッタ』から翻訳されたものであり、第三はこの二つの系統の折衷である¹³。上記の2写本はいずれも第一の系統に属するが、ヤアクービーのテキストにおいても、『クルアーン』語彙がしばしば使用されていることから、この第一の系統か、あるいはそれと同様の性格を持つ情報源を用いたと推定できるだろう。

なお、ヘブライ語テキストからの翻訳がまとまって行われるのは10世紀前半のサアディヤ・ガオンによるもので、これはヘブライ文字で書かれたアラビア語（いわゆる Judeo-Arabic）への翻訳である。

ただし、今回の翻訳部分において参照の対象となるモーセ以後の記述については、アラビア語の『旧約聖書』研究において、ほとんど体系的に扱われていない部分である。既存の研究の多くは『モーセ五書』の部分を対象としたものであり、「ヨシュア記」「士師記」「サムエル記（上・下）」、そして「列王記」について、『モーセ五書』と同様の時期の写本は見当たらず、いつごろに各文書の翻訳が出揃ったのかもはっきりとしない。その翻訳は『モーセ五書』よりも相当に遅れたものと推定されるが、それはヤアクービーが『モーセ五書』以降の部分について、複数の情報源を用いて『歴史』を著したと考えられることと符合するように思われる。

そのほか、『旧約聖書』テキストに由来し、それについて伝えるテキストは、ヤアクービーの『歴史』において重要な情報源の一つとされる『宝の洞窟』以外にも、当然ながら数多くある。そのようなテキストの中で最もよく知られているのはフラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』であろう。これは『旧約聖書』の物語を軸に、ヨセフスが生きた西暦1世紀までの古代イスラエルの歴史をギリシア語で著したものであって、『旧約聖書』に採録されていない記事や逸話なども多く含んでい

¹¹ Ibn Qutayba, *Ta'wīl Mushkil al-Qur'ān*, ed. Aḥmad Saqar, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmīya, 1981, p. 16.

¹² R. Vollandt, *Arabic Versions of the Pentateuch: A Comparative Study of Jewish, Christian, and Muslim Sources*, Leiden: Brill, 2015, pp. 142–151.

¹³ R. Vollandt, *Arabic Versions of the Pentateuch*, p. 64.

る¹⁴。また、主にキリスト教徒の著者によって著された、いわゆる「普遍史」伝統に連なる著作もある。例えば8世紀後半にシリア語で書かれた『ズクニーン年代記』も、天地創造から書き起こしている歴史書である¹⁵。こうした歴史書は多くの情報を先行する史書に依拠しているが、このようなテキストの一部をヤアクービーが参照した可能性ももちろんある。さらに様々な聖書注解を情報源としたということも可能性としては考えられるが、これについては訳者の能力では追いきれていない。

以上のような状況を踏まえると、現時点で得られた情報で、ヤアクービーが『宝の洞窟』以外に依拠した情報源を明らかにするのは困難である。詳細な分析を加えて、具体像を明らかにする作業は今後の課題としたい。

〈凡例の追加と修正〉

訳注に関わる凡例については「『歴史』訳注(1)」pp. 133–134および「『歴史』訳注(2)」pp. 117–118を参照されたい。以下、追加修正の必要な事項を列挙する。

(1) 追加

・『旧約聖書』の各種テキスト間の異同を示す場合には、従来の『旧約聖書』(=ヘブライ語、マソラ本文)に加えて、『七十人訳聖書』(ギリシア語)、『ペシッタ』(シリア語)の中の当該の文書名とその章節番号で示した。

(2) 修正(なお変更部分には下線を付した)

・これまでの訳注においてすでに登場しているものについては、本稿での初出時においても原綴の表示は省略する。

(3) 略号

本稿で文献表示の際に用いられる略号は以下のとおりである。なお、事典類については、文献表示の際はその項目名で表示し、ページ数は省略する(略号については各号で使用されるものについてその都度掲載する)。

L: *al-Ya'qūbī, al-Ta'rīkh*, ed. M. Th. Houtsma, Leiden: E. J. Brill, 1883 (repr. 1969). (ライデン版刊本)

M: Manchester, John Rylands Library, Arabic 801. (マンチェスター写本)

C: Cambridge, Cambridge University Library, Qq. 10. (ケンブリッジ写本)

¹⁴ 翻訳作業中に、『旧約聖書』に見られない要素が現れた際には『ユダヤ古代誌』(秦剛平訳、全6巻、ちくま学芸文庫、1999–2000年)も適宜参照しているが、ヤアクービーがこれを情報源としていたという印象はない。

¹⁵ 『ズクニーン年代記』については、太田敬子「シリア正教会とシリア語史料から見た初期イスラーム社会」『東方キリスト教諸教会：研究案内と基礎データ』(三代川寛子編、明石書店、2017年)、pp. 227–237を参照。

E: M. S. Gordon et al., *The Works of Ibn Wāḍiḥ Al-Ya‘qūbī: An English Translation*, 3 vols., Leiden: E.J. Brill, 2018.

EI²: Encyclopaedia of Islam, New Edition, 11 vols., ed. C.E. Bosworth et al., Leiden: E.J. Brill, 1960 (1954–2008).

EQ: Encyclopaedia of the Qur‘ān, 6 vols., ed. J. D. McAuliffe et al, Leiden: E.J. Brill, 2001–2006.

『新イスラム事典』: 嶋田襄平ら編『新イスラム事典』(平凡社、2002年)

『岩波イスラーム辞典』: 大塚和夫ら編『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年)

『旧約新約聖書大事典』: 旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』(教文館、1989年)

『古代オリエント事典』: 日本オリエント学会編『古代オリエント事典』(岩波書店、2004年)

『預言者ムハンマド伝』: イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註、後藤明ら訳『預言者ムハンマド伝』全四巻(岩波書店、2010–2012年)

『旧約聖書』: 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 [机上版]』全4巻(岩波書店、2004–2005年)

『七十人訳聖書』: 秦剛平訳『ヨシュア記』(青土社、2018年)、『士師記』(青土社、2019年)、『サムエル記』(青土社、2019年)、『列王記』(青土社、2019年)

『ペシッタ』: G. Greenberg, D. M. Walter trs., G. A. Kiraz, J. Bali eds., *Joshua*, Piscataway: Gorgias Press, 2015; *Judges*, Piscataway: Gorgias Press, 2015; *Samuels*, Piscataway: Gorgias Press, 2015; *Kings*, Piscataway: Gorgias Press, 2018; *Psalms*, Piscataway: Gorgias Press, 2020.

本稿は科学研究費「ファーティマ朝カリフ概念の研究によるカリフ史の再構築」(基盤研究(C)18K00984)、「イスラーム時代西アジアにおけるイラン概念の復活と変容」(若手研究20K13193)の研究成果の一部である。

〈訳注〉

モーセの後のイスラエルの民の預言者たちと王たち

モーセに死¹⁶が訪れた時、神は彼にヌンの子ヨシュア、すなわちヤコブの子ヨセフの民sha'b¹⁷の中のヌンの子ヨシュアを会見の幕屋に入らせ、ヨシュアを浄め、彼の手をヨシュアの体に置くように命じた¹⁸。[47] それは彼にある祝福がヨシュアに移るべくそのようにしたのであった。また神は、モーセがヨシュアに、イスラエルの民を率いる彼の後の指導者となることを遺言するようにと命じた。そこでモーセはそのようにした。モーセが死亡すると、ヨシュアがイスラエルの民を率いる彼の後の指導者となった。そしてモーセの死の翌日、ヨシュアは（イスラエルの民とともに）荒野を出たのであった。啓典の民の中にはそれは30日後であったと言う者もいる¹⁹。そして彼はシリアへと向かった²⁰。そこにはノアの子セムの子ルドLāwudの子アマレクの子孫たちである巨人jabābiraがいた。彼らのうちで最初に王となったのは、ハウバルHawbar²¹の子サマイダアal-Samayda²²であった。彼はイスラエルの民を襲撃しようとして、ティハーマTihāma²³の地からシリアへと向かった。ヌンの子ヨシュアは、サマイダアに対して人を派遣し、その者が彼を殺した。彼の死後に、その一族の一団が立ち上がったので、ヨシュアは彼らを殺した。

さて、ヨシュアが進んでバルカBalqā²⁴にまで至ると、彼はある男と出会った。彼の名はバラクBālaq²⁵と言い、彼にちなんでその地はバルカと名付けられたのである。ヨシュアたちは出陣して戦

¹⁶ マンチェスター写本においてはal-wafātと書いた後に行の上にwafāt-huと訂正している (M: 10a)。

¹⁷ 両写本ではshiya'となっているが (M: 10a; C: 13b)、刊本ではsha'bと直されている。ここでは文脈から刊本の訂正に従った。

¹⁸ アラビア語ではどちらの手をどちらの体に置いたのか文法的には確定できないが、『旧約聖書』「申命記」34章9節を参照し、モーセの手をヨシュアの体に置いたと解釈した。また、『旧約聖書』「申命記」31章14節も参照。

¹⁹ 『旧約聖書』「申命記」34章8節には、「イスラエルの子らは、モアブの平野で30日の間、モーセを悼んで泣いた。こうして、モーセのために喪に服す日が終わった」とある。

²⁰ 両写本ではfa-šāraとなっているが (M: 10a; C: 13b)、刊本ではwa-šāraと直されている。ここでは両写本に従った。

²¹ 両写本ではHūyīm? هويسنとなっているが (M: 10a; C: 13b)、刊本ではHawbarと直されている。ここでは刊本に従った。

²² ヤアクービーのテキストの中のイスラーム以前のアラブの歴史部分で、サマイダアはジュルフム族が支配していたメッカを奪取しようとして失敗したことが記されている (L: I, 253)。一方マスウーディー『黄金の牧場』では、ヨシュアの時代にアイラal-Aylaを支配したアマレク人の王として、ハウバルの子サマイダアが言及されている (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab wa Ma'dīn al-Jawhar*, ed. Ch. Pellat, 7 vols., Beirut: Manshūrāt Jāmi'at al-Lubnānīya, 1965–1979, vol. 2, pp. 165, 263; E: 303, n. 177)。なお、『旧約聖書』にはこれに相当する人物は見当たらない。

²³ アラビア半島西部の紅海沿岸地域を指す (G.R. Smith, “Tihāma,” *EI*²)。

²⁴ 現在のヨルダン地域を指すアラビア語の地名。『旧約聖書』の時代にはアンモン、モアブ、ギルアドなどの国を指していた (J. Sourdél-Thomine, “Balqā'”, *EI*²)。ヤアクービーの著した地理書『諸国誌』においては、アンマンやイエリコを含む地域とされている (al-Ya'qūbī, *Kitāb al-Buldān*, in Ibn Rusta, Abū 'Alī Aḥmad b. 'Umar, *Kitāb al-A'lāq al-Nafīsa*, ed. M. J. De Goeje, Leiden: E.J. Brill, 1892, p. 326)。

²⁵ 『旧約聖書』「民数記」に登場するモアブの王。そこでは侵入するイスラエル諸部族に脅威を感じ、バラクにイスラエルを呪詛させようとしたとされる (K. Balzer + 月本昭男「バラク 1」『旧約新約聖書大事典』)。

い始めたが、バルカの人々を誰一人殺すことはできなかった。ヨシユアがそのことについて尋ねると、以下のように言われた。「彼の町には、占星術師の女性があり、女性器 farj を太陽に向け、その後、計算する²⁶。それが終わると、彼女のもとに騎馬隊²⁷が出揃い、(彼女の計算によって)その死の時が訪れた者 man ḥadara ajalū-hu は出撃しない」と。そこでヨシユアは2ラクア rak'atayni²⁸の礼拝を行い、神に太陽を1時間遅らせるよう祈った。それで(神は)彼のために1時間遅らせた²⁹。それによって彼女の計算が彼女にとって混乱したものとなった。彼女はバラクに言った。「彼らがあなたに求めているものについて考え、彼らに与えなさい。まことに私の計算は、私にとって混乱した³⁰ものとなった」と。彼は言った。「あなたの道具を検分し tuṣaffahī, そこから(答えを)出せ。戦わずに、和約を結ぶことはできないのだ」と。彼女は、事態が混乱したために、その道具から何も知ることができないまま騎馬隊³¹を検分することになってしまった。そして彼らは、かつてどの民もそのように殺されたことがないほどに殺された。彼らはヨシユアに和約を求めた。しかしヨシユアは彼ら(の申し出)を拒否し、その女性の引き渡しを求めた。バラクは「私は彼女を引き渡さない」と言った。すると彼女は「私を彼に引き渡しなさい」と言った。それでバラクは彼女をヨシユアに引き渡すと、ヨシユアは和約を結んだ。そこで彼女は彼に言った。「あなたの指導者 ṣāhib に対して下されたものの中に、女性たちを殺すことについてはありますか?」と。彼は「いいえ」と言った。彼女は「それならば私はあなたの宗教に入りましょう」と言った。彼は「ならば、別の町に住みなさい」と言った。それで彼は彼女を [48] 別の町に住ませた。

ヌンの子ヨシユアがバルカを征服すると、イスラエルの民は多くの姦通 al-zinā', 飲酒 shurb al-khumūr をした。彼らはその女性たちと交わり、彼らの間では密通 al-fāhisha がはびこった。それでヌンの子ヨシユアにそれが重くのしかかり、彼は彼らに神を恐れさせ、彼らに神の懲罰 saṭwa について警告したが、彼らは気に留めなかった。そこで神はヌンの子ヨシユアに「もしお前が望むな

²⁶ この一文については、この解釈を説明可能な典拠は見当たらないが、英訳も同様の解釈を採っている (E: 304)。

²⁷ 両写本では al-khayl となっているが (M: 10a; C: 13b)、刊本では ḥiyal と直されている。英訳は注釈において検討し、刊本に従って「器具」と訳しているが (E: 304, n. 180)、ここでは両写本に従って解釈した。

²⁸ イスラームの礼拝において、立礼、屈礼、平伏礼からなる礼拝の最小単位 (中田考「ラクア」『岩波イスラーム辞典』)。ヤアクービーはここで、ヨシユアが祈る際に、イスラーム式の礼拝の用語を用いている。

²⁹ この逸話に直接対応する記述は『旧約聖書』「ヨシユア記」には見当たらないが、『旧約聖書』「ヨシユア記」10章12-13節において、ヨシユアがヤハウエに祈って、太陽を天の中空に留ませたという記述がある。また、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は、ヨシユアが不信仰となったイスラエルの民バラムと戦った際に、太陽がしばし沈まぬよう神に祈り、サバト (ユダヤ教徒の安息日) の始まる日没が遅くなったため、勝利したことを伝えている (Abū Ja'far Muhammad b. Jarīr al-Tabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, 15 vols., Leiden: E.J. Brill, 1879-1901, serie 1, pp. 512-513)。また、その後にギベオンの王と戦った際にも同様に、サバトの時が来ないよう、太陽をそこに留めておくようヨシユアが祈る場面がある (al-Tabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 515)

³⁰ マンチェスター写本では ahlata と (M: 10a)、ケンブリッジ写本では ihtalata となっているが (C: 13b)、刊本では ikhtalata と直されている。ここでは刊本に従った。

³¹ 注27と同様に両写本に従い al-khayl として解釈した。

らば、彼らの敵に彼らを支配させる。もしお前が望むならば、私は彼らを早魃 *sinīn* によって滅ぼす。また、もしお前が望むならば、すばやく迅速な死によって（滅ぼす）」という啓示を下した。そこでヨシュアは言った。「彼らはイスラエルの民です。私は、あなたが彼らの敵に彼らを支配させることも、早魃で彼らが滅びることも求めません。そうではなくて迅速な死によって（彼らが滅びることを望みます）」と。それで彼らの間に疫病が生じ、一度に7万人が死んだ³²。アムラムの子モーセの後にイスラエルの民を率いたヨシュアの（指導者としての）期間は、27年間であった³³。

その後、ヌンの子ヨシュアの後にイスラエルの民に対して不信仰者クシャン *Dūshān al-Kufīrī*³⁴ が支配者となった。そして8年間彼らを支配し続けた。クシャンの後には、ヤコブの子ユダの支族から、カレブ *Kālib* の兄弟ケナズ *Qanaz*³⁵ の子オトニエル *‘Uthnāyil*³⁶ が [40]³⁷ 年間指導者となった。既にイスラエルの民の悪徳と傲慢はいや増しており、それで神は彼らをモアブ³⁸ の巨人クーシェ

³² ヤアクービーのこの部分の記述は『旧約聖書』「民数記」25章6-9節の記述と、『旧約聖書』「サムエル記下」24章13-15節の記述が組み合わせられている (E: 305, n. 182)。前者では、モーセの時代にイスラエルの男性がミディヤンの女性と結婚したために、疫病が起り、2万4千人が死亡したとされる。後者では、神がイスラエルの民に与える罰としてダビデに三択を迫り、その結果7万人が死亡したとされる。マスウーディー『黄金の牧場』ではヤアクービーのテキストと比較的近い、ヨシュアの時代に7万人（あるいは9万人）が疫病で死亡した逸話を伝えている (al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 57)。

³³ ヨシュアがイスラエルの民を率いた期間については『旧約聖書』に記述が見当たらない。なお、『旧約聖書』「ヨシュア記」24章29節によると、彼は110歳で死亡したという。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』によるとヨシュアの統治期間は27年、126歳で死亡したという (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 515-516)。マスウーディー『黄金の牧場』には、統治期間の記載はないが、110歳で死亡したという (al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 57)。

³⁴ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *Dūsān al-Kufīrī* となっているが (C: 14a)、刊本では *Dūshān al-Kufīrī* と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には *Dūshān al-Kufīrī* とあり (M: 12a)、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

なお、マスウーディー『黄金の牧場』では、*Kūshān al-Kufīrī* とされ (al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 57)、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では単に *Kūshān* とする (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 545-546)。英訳ではこの人物を『旧約聖書』「士師記」3章8節の、「アラム・ナハラタイムの王クシャン・リシュアタイム」に比定している (E: 305, n. 183)。なおリシュアタイムは「二重の悪」の意 (E. Jenni + 月本昭男「クシャン・リシュアタイム」『旧約新約聖書大事典』)。

本訳注では、この人物と同一とみなし、訳語として「不信仰者クシャン」を当てた。

³⁵ 両写本では *fāw* となっているが (M: 10a; C: 14a)、刊本では *Qanaz* と直されている。ここでは刊本に従った。なお『旧約聖書』「士師記」1章13節ではケナズはカレブの弟とされている。

³⁶ マンチェスター写本では *عثنائل* (M: 10a) と、ケンブリッジ写本では *عثنائل* となっているが (C: 14a)、刊本では *‘Uthnāyil* と直されている。ここでは刊本に従った。

³⁷ 両写本では *arba‘īn* がなく単に *sana* となっているが、刊本では、直後にオトニエルが40年間王として支配したという記述があることから *arba‘īn* を補っている。『旧約聖書』「士師記」3章11節、また、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でもオトニエルの統治期間を40年間としている (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 545-546; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, pp. 57-58)。

³⁸ モアブはヨルダン川東岸地域に住んでいた民族の名 (G. Molin + 唐橋文「モアブ」『旧約新約聖書大事典』)。

Kūsh³⁹に支配させていたのだった。オトニエル⁴⁰が王となると、クーシュを殺し、40年間王として支配した。その後イスラエルの民は信仰をおろそかにし、不信仰となった。それで神はモアブ Mu'ab⁴¹の王エグロン'Aqlūnに15年間彼らを支配させた⁴²。その後彼らは悔悟したので、神は彼らにエフライム支族の中からゲラの子エフド Ahūr⁴³と呼ばれる男を遣わした。彼はモアブの王エグロンを殺した。彼は彼の左手と右手で戦うのが常であった。そのため、人々は彼のことを「二つの右手の持ち主」と呼ぶようになった⁴⁴。彼は [49] 両方に刃のある剣を作った taba'a 初めての人物であった。それ以前は片刃⁴⁵であった。彼の時代にはシリアに建造物 al-baniya が建てられた⁴⁶。エフド⁴⁷が王になって25年で第四千年紀が終わった⁴⁸。

³⁹ 両写本では Kūsh b. Hiyār māta となっているが (M: 10a; C: 14a)、刊本では Kūshān jabbār Mu'ab と直されている。マスウーディー『黄金の牧場』では、Kūsh jabbāran kāna bi-arḍ al-Balqā' bi-Mu'ab とある (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 58)。ここでは、前述のクシャンとは別人物とみなし、クーシュと訳出した。またクーシュの後に続く語については、刊本の修正に従った。

⁴⁰ 注36と同様。

⁴¹ 両写本では Muwāt となっているが (M: 10a; C: 14a)、刊本では Mu'ab と直されている。ここでは刊本に従った。以下も同様。

⁴² 『旧約聖書』「士師記」3章14節では、18年間支配したとされる。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも18年間とされる (al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 58)。

⁴³ 両写本では Ahūr となっているが (M: 10a; C: 14a)、刊本では Ahūd と直されている。ネルデケはライデン版刊本に対する書評の中で、この部分は間接的に『ベシッタ』に由来するものであろうとしている (Th. Nöldeke, "Review: Ibn Wādih qui dicitur al-Ja'qubī historiae. Pars prior historiam ante-islamicam continens. Eddidit indicesque adjecit M. Th. Houtsma," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*: 38 (1884), pp. 153–160)。それを踏まえて、ここでは両写本に従った。

⁴⁴ 『旧約聖書』「士師記」3章15–21節によると、エフドは左利きで、左手の剣でエグロンを殺したという。一方、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』によるとエフドはしおれた右手でエグロンを殺したという (al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546)。

⁴⁵ 両写本では dhāt aqfiya となっているが (M: 10a; C: 14a)、刊本では dhawāt aqfiya と直されている。ここでは刊本に従った。

⁴⁶ マンチェスター写本では buniyat al-tabniya と (M: 10)、ケンブリッジ写本では buniyat al-tanbiya となっているが (C: 14a)、刊本では buniyat al-baniya と直されている。ここでは刊本に従って訳出した。ただし、英訳では固有名詞 al-Tabniyya として訳出している (E: 306, n. 186)。

⁴⁷ 注43と同様。

⁴⁸ 第四千年紀が終わった年は、『宝の洞窟』の当該部分の西方シリア語写本に基づく校訂においてはエフドが王位について20年とする (S. Ri, ed. & tr. *La Caverne des trésors: les deux recensions syriaques*, Lovanii: E. Peeters, 1987, vol.2, pp. 104, 105.)。一方、マスウーディー『黄金の牧場』では35年とされる (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 58)。

なおエフドの統治期間をヤアクービーは記していないが、『旧約聖書』「士師記」3章30節では80年、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』でも80年とされている (al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546)。一方、マスウーディー『黄金の牧場』は55年とする (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 58)。

やがてエフト⁴⁹の後にイスラエルの民が信仰を蔑ろにしたので、神はカナン^{ないがし}の王ヤビン Yābīn⁵⁰に彼らを20年間支配させた⁵¹。それ以前はアナト‘Ānāt⁵²の子シャムガル Shamjar⁵³がイスラエルの民の王で、彼はパレスチナの人々を600人殺した⁵⁴。

その後神は彼らに慈悲をかけ、イスラエルの民にナフタリ支族出身のアビノアム Abīnu‘am⁵⁵の子バラク Bāraq という男を遣わした⁵⁶。彼は40年間彼らの王となった⁵⁷。

その後イスラエルの民は不信仰に至ったので、神はミディアンの人々に彼らを7年間支配させた⁵⁸。

その後神は彼らに慈悲をかけ、彼らに対してマナセ支族出身のヨアシュ Yuwās の子ギデオン Jad‘ān という男を遣わした。彼は信仰篤い者であった。彼こそがミディアンの人々に夜襲をかけ、彼らのうち28万5千人⁵⁹を殺した者であった⁶⁰。そして40年間彼らの王となった⁶¹。

それから、彼の後に彼の息子、ギデオンの子アビメレク Abīmalik⁶²が王となった。彼は邪な者であった。彼こそが、自分の70人の兄弟を殺した者であった⁶³。しかし、ある女性が彼を殺した。彼

⁴⁹ 注43と同様。

⁵⁰ 両写本では Bās باس となっているが (M: 10a; C: 14a)、刊本では Yābīn يابين と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『ペシッタ』では Nabīn という読みとなっており、解説において推定したようにこの部分が『ペシッタ』の固有名表記を反映しているとする、Nābīn نابين という読みとするのが適切かもしれない。

⁵¹ 『旧約聖書』「士師記」4章1-3節に対応。タバリーとマスウーディーも同様に彼の統治期間を20年としている (al-Ṭabarī, *Ta‘rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁵² 両写本では Ghābān となっているが (M: 10a; C: 14a)、刊本では ‘Ānāt と直されている。ここでは刊本に従った。

⁵³ マンチェスター写本では Shamjar と (M: 10a)、ケンブリッジ写本では Samḥar سمحر となっているが (C: 14a)、刊本では Samḥar としている。ここではマンチェスター写本に従った。

⁵⁴ 『旧約聖書』「士師記」3章31節では「彼はペリシテ人の600人を牛を追う突き棒で撃ち倒した」とされる。

⁵⁵ マンチェスター写本では ‘NHM انهيم と (M: 10a)、ケンブリッジ写本では انهيم となっているが (C: 14a)、刊本では Abīnu‘am と直されている。ここでは刊本に従った。

⁵⁶ 『旧約聖書』「士師記」4章6節に対応。

⁵⁷ 『旧約聖書』「士師記」5章31節に対応。同様にマスウーディー『黄金の牧場』でもバラクの統治期間は40年とされている (al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁵⁸ 『旧約聖書』「士師記」6章1節に対応。マスウーディーは5人の王の名前を挙げた上でその統治期間を7年と3ヶ月としている (al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではヒジャーズの境域にいるロトの子孫たちが7年間支配したとされる (al-Ṭabarī, *Ta‘rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546)。

⁵⁹ 両写本では khamsan となっているが (M: 10b; C: 14a)、刊本では khamsatan と直されている。ここでは刊本に従った。

⁶⁰ 『旧約聖書』「士師記」7章9-22節に対応。

⁶¹ 『旧約聖書』「士師記」8章28節に対応。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも彼の統治期間は40年間とされる (al-Ṭabarī, *Ta‘rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁶² 両写本では Bīmalik となっているが (M: 10b; C: 14a)、刊本では Abīmalik と直されている。ここでは刊本に従った。

⁶³ 『旧約聖書』「士師記」9章5節に対応。

女は町の門の上から石を投げ、彼を打ち砕いたのであった⁶⁴。彼の王位⁶⁵は3年間であった⁶⁶。

その後イッサカル Yishājar⁶⁷ 支族出身のプア Fuwāy⁶⁸ の子トラ Tālī⁶⁹ が王となった。彼は23年間(王位に)留まった⁷⁰。

その後マナセ支族出身のギルアド Jal'ād⁷¹ が王となった。彼には30人の息子がおり、彼とともに30頭の雌の仔馬に乗っていた⁷²。[50] 彼の王位は22年間であった⁷³。

その後イスラエルの民は不信仰に至ったので、神はアンモン'ammūn⁷⁴ の民に17年間にわたって

⁶⁴ 『旧約聖書』「士師記」9章50-54節によると、テベツの町を攻め取ったアビメレクが、人々の立てこもる塔を攻撃しようと近づいた時、一人の女性が、ひき白の上石を投げつけ、彼の頭蓋骨を砕いた。その後彼は、女性に殺されたと言われないために、部下に自分を刺し貫かせたという。

⁶⁵ 両写本では *mulk* の後に接尾代名詞 *hu* がなく (M: 10b; C: 14a)、刊本ではそれを補っている。ここでは刊本に従った。

⁶⁶ 『旧約聖書』「士師記」9章22節に対応。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では同じく3年間支配したとされ、マスウーディー『黄金の牧場』では3年3ヶ月とされている (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁶⁷ 両写本では *Isākhān* となっているが (M: 10b; C: 14a)、刊本では *Yishājar* と直されている。ここでは刊本に従った。

⁶⁸ 両写本では *Quwāy* となっているが (M: 10b; C: 14a)、刊本では *Fuwāy* と直されている。ここでは刊本に従った。

⁶⁹ マンチェスター写本では *Yāligh* となっているが (M: 10b)、ケンブリッジ写本では *𐤏𐤊* と別列点が付されており (C: 14a)、刊本では *Tālī* と直されている。ここでは刊本に従った。

⁷⁰ 『旧約聖書』「士師記」10章1-2節に対応。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも同様に23年とされている (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁷¹ マンチェスター写本では *Khal'ād* と (M: 10b)、ケンブリッジ写本では *Hil'ād* となっているが (C: 14a)、刊本では *Jal'ād* と直されている。ここでは刊本に従った。『旧約聖書』「士師記」10章3節ではギルアド人ヤイルとされており、ヤアクービーのテキストにおいてはヤイルの名が脱落している可能性が高い。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも、トラの後に王となった人物はヤイル *Yā'ir* あるいは *Yā'ir* であるとされている (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。「ギルアド」は、ヨルダン東部の地域名であり、ガド支族とマナセ支族の嗣業の地とされた (G. Sauer + 秋吉輝男「ギレアデ」『旧約新約聖書大事典』)。

⁷² 『旧約聖書』「士師記」10章4節では「彼には30人の息子がおり、彼らは30頭のろばに乗り、30の町を所有していた」とされる。

⁷³ 『旧約聖書』「士師記」10章3節に対応。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でもヤイルの統治期間は22年とされている (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁷⁴ アンモンはイスラエルの東隣の民で、自らの王国を建てていた。ギルアドにヨルダン川西岸からエフライム支族が移住したことで、イスラエルとの間に武力衝突が起こるようになった (H.P. Rüger + 目臺なおみ「アンモン」『旧約新約聖書大事典』)。

彼らを支配させた⁷⁵。彼の時代にfi zamāni-hi⁷⁶、シリアにスールŠūr⁷⁷の町が建設された。彼はイスラエルの民に過酷な罰sū'al-'idhāb⁷⁸を科した⁷⁹。

その後、神は彼らに慈悲をかけ、彼らにエフタYaftah⁸⁰という名のギルアドの民の一人を遣わした。彼はイスラエルの民の中からエフライム家āl Afrā'imの人々を4万2千人殺した⁸¹。彼はマナセ支族の出身であった。彼の王位は6年間であった⁸²。

その後、ナフシオンNakhshūn⁸³と呼ばれたイブツァンAbiṣān⁸⁴が7年間彼らの指導者となった⁸⁵。

その後、ゼブルン⁸⁶支族のエロンĪlānが20年間彼らの指導者となった⁸⁷。

⁷⁵ 『旧約聖書』「士師記」10章7-8節では「ヤハウェの怒りはイスラエルに向かって燃え上がり、彼らをペリシテとアンモンの子らの手に売り渡した。彼らは、その年を含めイスラエルの子らを18年にわたって打ち砕き、ヨルダン河の向こう側、ギルアドのアモリ人の地にいるすべてのイスラエルの子らを虐げた」とされる。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でもアンモン人の支配は18年とされている (al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁷⁶ 直前には「アンモンの民」による支配が述べられており、ここでは接尾代名詞huが誰を表しているか不明である。英訳の注釈は、次の文の主語と合わせて、本来、この前に支配者の名前が言及されていて、それが欠落しているという可能性を指摘している (E: 306, n. 191, 192)。

⁷⁷ 南部レバノンの地中海沿岸の都市ティルスのアラビア語での呼び名。『旧約聖書』ではソロモンの時代にヒラムという王がエルサレムの神殿の建設のために杉を送ったことが知られる (M. Lavergne, “Šūr,” *EF*)

⁷⁸ この句は『クルアーン』2章49節、6章157節、7章141, 167節、14章6節、27章5節、39章24, 47節、40章45節に用いられている。一義的には神から与えられる罰であるが、2章49節や7章167節のように、それがファラオなどの支配者を通して与えられる例も見られる。ここでは支配者の名は明示されていないが、そうした支配者が直接の主語であると解釈した。

⁷⁹ この一文の主語も不明である。

⁸⁰ ただし、『ベシッタ』ではNaphthahとなっている。

⁸¹ 『旧約聖書』「士師記」11-12章によると、アンモン人に追われたギルアドの民を率いてアンモン人に勝利したエフタは、その後、彼らとともにアンモン人と戦わなかったエフライムの民を攻撃し、打ち破ったとされる。

⁸² 『旧約聖書』「士師記」12章7節に対応。

⁸³ マンチェスター写本ではحشوبと最初の文字に弁別点がない (M: 10b)。ケンブリッジ写本ではYaḥsūb *بحسوب* となっており (C: 14a)、刊本ではNakhshūnと直されている。英訳の注釈によると、『旧約聖書』からナフシオンへの同定をすることはできないが、『宝の洞窟』およびマスウーディー『黄金の牧場』に同様の例があるという (E: 307, n. 194)。『宝の洞窟』で当該部分は、東方シリア語写本に基づく校訂においてはアヴィネツェル Avineṣer の別名として Naḥashōn という名が挙げられ、西方シリア語写本に基づく校訂においてはバツォン Baṣon の別名として Naḥashōn という名が挙げられている (S. Ried. & tr. *La Caverne des trésors*, vol. 2, p. 104.)。一方、マスウーディー『黄金の牧場』校訂本の本文テキストは Bajshūn とするが、注釈には英国図書館写本の読みとして Naḥshūn が提示されている (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。またタバリー『諸預言者と諸王の歴史』は Bajshūn あるいは Bajsūn としている (al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 546)。ここでは刊本に従った。

⁸⁴ 両写本では Abiḍān となっており (M: 10b; C: 14a)、刊本では Abiṣān と直されている。ここでは刊本に従った。

⁸⁵ 『旧約聖書』「士師記」12章9節。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも彼の統治期間は7年間とされている (al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 547; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁸⁶ 両写本では Ziyūlūn となっているが (M: 10b; C: 14a)、刊本では Zabūlūn と直されている。ここでは刊本に従った。

⁸⁷ 『旧約聖書』「士師記」12章11節では10年間とされる。

その後、アブドン ‘Akrān⁸⁸が8年間彼らの指導者となった⁸⁹。

その後、アラーンカシャース Alānkashās⁹⁰が彼らの指導者となった。彼はイスラエルの民に過酷な罰⁹¹を科し、彼らに対して40年間苛烈な支配を行った。

その後、サムソン Shamsūnが20年間彼らの指導者となった⁹²。

その後、彼らには12年間誰も指導者はいなかった⁹³。

その後、祭司エリ ‘Ālī al-Aḥbārīが40年間彼らの指導者となった⁹⁴。

それから、預言者サムエルが彼らの指導者となった。彼こそは、神が彼について《彼らが彼らの預言者に、「われらに王を遣わしてくれ。我らは神の道において戦う」と言った時のこと》⁹⁵と言及した人物であった。彼らは預言者サムエルに、「神の敵と戦うように⁹⁶、王を私たちに遣わしてくれるよう神に頼んでくれ」と言った⁹⁷。彼は「あなたがたには忠実さもなく、心の正直さもない」と言った。彼らは「そんなことはない」と言った。彼は言った。「《神はおまえたちにタールート Tālūt⁹⁸を王として遣わし給うた》⁹⁹。彼の名はサウル Shāwulである」と。彼らは言った。「神にかけて、彼は

⁸⁸ この人物については、英訳の注釈では、ヘブライ語『旧約聖書』では‘Abdōnという人物が、『ペシッタ』では‘Akrōnとなっていると指摘されている (E: 307, n. 195)。なお、『七十人訳聖書』はアブドーンとする。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではアクルーン‘Akrūn、マスウーディー『黄金の牧場』ではアジュールーン‘Ajlūnとされている (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 547; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁸⁹ 『旧約聖書』「士師記」12章13–14節に対応。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも彼の統治期間は8年間とされている (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 547; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁹⁰ 両写本ではالاكشاسと4文字目に弁別点がない形になっており (M: 10b; C: 14a)、刊本ではalānkashāsと直されている。ここでは刊本に従った。『旧約聖書』「士師記」において対応する人物は不明。タバリーとマスウーディーは40年間パレスチナの民／王が支配したとしている (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 547; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59; E: 307, n. 196)。

⁹¹ 両写本ではsūm al-‘idhābとなっているが (M: 10b; C: 14a)、刊本ではsū’ al-‘idhābと直されている。ここでは刊本に従った。

⁹² 『旧約聖書』「士師記」16章31節に対応。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも同様に20年間とするが、マスウーディーはサムソン Shamsūnの治世をナフション Bajshūnの直後に置いている (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 547; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁹³ 『宝の洞窟』では、サムソンの後に、18年間の指導者がいない期間があったとする (S. Ri, *La Caverne des trésors*, vol. 2, p. 104)。

⁹⁴ 『旧約聖書』「サムエル記上」ではシロの祭司とされ、サムエルは彼のもとで育ったとされる。その死については「サムエル記上」4章18節に記載がある。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』とマスウーディー『黄金の牧場』でも同様に彼の統治期間は40年とされる (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 547; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 59)。

⁹⁵ 『クルアーン』2章246節。

⁹⁶ 両写本ではnuqātiluとなっているが (M: 10b; C: 14a)、刊本ではyuqātiluと直されている。ここでは刊本に従った。

⁹⁷ 『旧約聖書』「サムエル記上」8章19–20節に対応。

⁹⁸ 『旧約聖書』に登場するサウルのこと。この後、ヤアクービーの本文テキストにおいてもサウルと同一人物であることが示されている (R. Firestone, “Tālūt,” *EI*²)。

⁹⁹ 『クルアーン』2章247節。

王や預言者の支族の出身ではなく、レビやユダの子孫でもない。そうではなくて彼はベニヤミン支族の出身なのだ」と¹⁰⁰。サムエルは言った。「あなたたちは神（の決定）について選択の余地はない」と。サムエルは[51] サウル、すなわちタールートを呼んで、彼に言った。「主は私にあなたを王としてイスラエルの民に遣わせと命じた。神はあなたにアマレク人に対して復讐するよう命じている。アマレク人とそのもとにあるすべてを滅ぼせ。そのもとに一人の男も女も乳飲み子も一匹の仔牛も仔羊もラクダもロバも残してはならない」と¹⁰¹。サウルは皆にそのように指示した。彼らの戦士の数は40万人であった¹⁰²。

サウルはアマレク人のもとへ向かい、その人々を殺した。そして、アマレク人の王アガグ Aghāgh¹⁰³を捕えたが、生きてまま捕虜にして、助命した。またサウルたちは牛や羊を殺すのをやめ、自分たちのものとして残した。そこで神はサムエルに「サウルは私に背き、アマレク人の王が持っているすべてのものとアマレク人を滅ぼさなかった」と啓示を下した¹⁰⁴。サムエルはサウルに言った。「神はあなたの行いにお怒りだ¹⁰⁵」と。そこでサウルはアガグを呼んで言った。「最も苦い死は何だろうか?」と。彼は言った。「のどを切ること dhabh だ」と。そこでサウルはアガグの喉を切った¹⁰⁶。その後サウルはサムエルに言った。「ともに行って、神の前で跪拝しよう」と。サムエルがそれを断ったので、サウルは彼の外衣を掴んで、それを引き裂いた。サムエルは言った。「このように、お前の王位は引き裂かれているのだ」と¹⁰⁷。

（神の）助けがサウルから取り上げられ irtafa‘at、彼のもとに悪い風 al-rīh al-sū’¹⁰⁸が吹き込んだ。すると¹⁰⁹、彼は取り乱し、顔色が変わっていた。そこで彼の配下の者たちが彼に言った。「この悪い

¹⁰⁰ ベニヤミン支族という出自に関する議論の記述は『旧約聖書』「サムエル記上」には見当たらない。『クルアーン』2章247節にも、人々がサウルの王権に疑問を述べる言葉として「どうして彼にわれらの上に立つ王権が与えられるのか。われらは彼より王権にふさわしい。一方、彼は財産も豊かに授かっていない」とあるが、出自を議論したものではない。ファイアストーンによると、『旧約聖書』「士師記」19-20章に描かれた、ベニヤミン支族がレビ人の妻を辱め、死に至らせたことに端を発する制裁戦争が、ベニヤミン支族が王にふさわしくないとされる背景にあるという (R. Firestone, “Tālūt,” *ET*²)。

¹⁰¹ 『旧約聖書』「サムエル記上」15章1-3節に対応。

¹⁰² 『旧約聖書』「サムエル記上」15章4節では「歩兵が20万、さらにユダの男たちが1万いた」とされる。

¹⁰³ 両写本では A‘ā となっているが (M: 10b; C: 14b)、刊本では Aghāgh と直されている。ここでは刊本に従った。以下も同様。

¹⁰⁴ 『旧約聖書』「サムエル記上」15章11節に対応。

¹⁰⁵ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では ‘aṣaba となっているが (C: 14b)、刊本では ghaḍiba と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には、ghaḍiba とあり (M: 10b)、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

¹⁰⁶ 『旧約聖書』「サムエル記上」15章32-33節では、アガグを呼び、殺したのはサムエルとされている。

¹⁰⁷ この一連の逸話は『旧約聖書』「サムエル記上」15章24-31節で語られている。

¹⁰⁸ 『旧約聖書』「サムエル記上」16章14節には「ヤハウエの霊はサウルから離れ、ヤハウエの悪霊が彼をおびえさせた」とある。英訳では evil spirit とする (E: 308)。一般に、アラビア語の al-rīh は「風」であり、「霊」にあたる単語は rūh であるため、ここでは「悪い風」と訳出した。

¹⁰⁹ 両写本では fa-kāna となっているが (M: 10b; C: 14b)、刊本では wa-kāna と直されている。ここでは両写本に従った。

風があなたに吹き込んだ時、もし詩人たち sha'ārīr¹¹⁰の中で声の良い者を連れて来たなら、その者があなたに歌い聴かせるだろうに」と¹¹¹。そこで彼はエッサイ Iṣhāに「お前の息子ダビデ Dawūdを私のもとに送れ」と伝えさせた¹¹²。それでエッサイはサウルのもとにダビデを送った。サウルの息が詰まった¹¹³時、ダビデが豎琴 qītār¹¹⁴を手にとって、その音色に乗せて歌った。するとサウルから悪い風が去るのであった。

その後サウルの時代にいた¹¹⁵異教徒たち ḥunafā'¹¹⁶が集まり、サウルは彼らと戦った。彼らは星辰崇拜者 'abadat al-nujūmであった。サウルは戦士たちを率いて彼らのもとへ出陣した。すると彼らの中から、その身長が5ズイラーウ¹¹⁷の男が出てきた。彼の名はゴリヤテ Ghulyāth、すなわちジャールート Jālūt¹¹⁸であった。彼は言った。「おまえたちの一人が俺と対峙するのだ」と。ダビデはサウルに言った。「私が彼と対峙しましょう」と。サウルはダビデに言った。[52]「行くがよい。主はお前とともにある」と。するとダビデは杖と五つの石を取って、ゴリヤテのもとに出ていった。ゴリヤテはダビデを見ると、彼を見くだして言った。「お前は杖と石を持って、犬のところにも行く

¹¹⁰ 両写本では al-sha'āyīn となっているが (M: 10b; C: 14b)、刊本では sha'ārīr と直されている。ここでは刊本に従った。

¹¹¹ 『旧約聖書』「サムエル記上」16章16節には、「われらが主よ、どうか御前に仕えるこの家来どもにお命じになり、豎琴に巧みな者を捜させて下さい。神からの悪霊があなたに臨むとき、その者が琴を弾けば、あなた(の気分)は良くなるでしょう」とある。

¹¹² 『旧約聖書』「サムエル記上」16章19節に対応。

¹¹³ マンチェスター写本では khubiqa と (M: 10b)、ケンブリッジ写本では hubiqa となっているが (C: 14b)、刊本では khuniqa と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『旧約聖書』「サムエル記上」16章23節には「神の霊がサウルに臨むたびに」とされている。英訳ではおそらくはそれを踏まえて、これを khabila と読み、「取り憑かれた」と訳出している (E: 308, n. 201)。

¹¹⁴ 両写本では fithāra となっているが (M: 10b; C: 14b)、刊本では qītār と直されている。ここでは刊本に従った。

¹¹⁵ 両写本では alladhī となっているが (M: 10b; C: 14b)、刊本では alladhīna と直されている。ここでは刊本に従った。

¹¹⁶ 単数形は ḥanīf。この語はイスラームの文脈では主にイスラーム以前のアラビア半島にいたアブラハムの一神教を受け継ぐ人々のことを指すが、英訳の注釈によると、ここではシリア語の hanpē に由来する「異教徒 (pagans)」の意で用いられているという (E: 308–309, n. 202)。例えば、マスウーディーはこれをサービア教徒を指す言葉として、次のように紹介している。「彼らはそれ以前には、ハニーフたち、すなわちサービア教徒の考えに従っていた。それは、ブーダースブ Būdāsb がタフムーラス Tahmūrath にもたらしたものであった。これは、アラビア語化されたシリア語の単語である」(al-Mas'ūdī, *Kitāb al-Tanbīh wa al-Ishrāf*, ed. M. J. de Goeje, Leiden: E.J. Brill, 1894, pp. 90–91)。なお、ビールーニー『過去の痕跡』においても、ヒジュラ暦228年以降にはサービア教徒と呼ばれることになった人々は、それ以前は al-ḥunafā', al-wathanīya, al-Harrānīya と呼ばれていたと述べられている (al-Bīrūnī, *Āthār al-Bāqiya 'an al-Qurūn al-Khāliya*, ed. C.E. Sachau, Leipzig: Brockhaus, 1876–1878, p. 318)。

¹¹⁷ ズイラーウは腕尺を示す長さの単位(『歴史』訳注(1)], p. 144, n. 73参照)。なお、『旧約聖書』「サムエル記上」17章4節では6アンマ半、ヨセフス『ユダヤ古代誌』では4アンマ半と記される(アンマも同じく腕尺を示す長さの単位)。

¹¹⁸ 『クルアーン』2章249–251節にはジャールートとして言及されており、クルアーンではそれ以外の名前では言及されない。それを踏まえた補足であろう。

のか」と。ダビデは言った。「犬よりも悪しきもの¹¹⁹のところへ」と¹²⁰。そして彼は袋 *mikhlat* から石を取り出し、ゴリヤテにそれを投げた。すると、ゴリヤテの額に石が埋まり、倒れた。それで、ダビデは彼に向かって走り、ゴリヤテの剣を取って、彼の首を切った¹²¹。そして彼は帰還を果たした *akhadha rāji'an*。それでゴリアテの軍は敗れた。ユダの民の喜びは強くなった。するとサウルは不安を感じ、ダビデを妬んだ。それで彼はダビデを自分のもとから遠ざけ、千人の長として出発させた。彼をユダの民の地位のために¹²²生かしておいたのである¹²³。ダビデはサウルの娘ミカル *Mikhal*¹²⁴と結婚した¹²⁵。

しかしサウルはダビデの殺害を望むようになった。それでダビデを星辰崇拝者である異教徒たちと戦わせるために送り出した。しかし、神がダビデに対して勝利をもたらすのであった。そのため、サウルは策を弄さずに彼を殺そうとしたが、ダビデは逃げて、預言者サムエルのもとにやって来た。ダビデは彼にサウルのことについて知らせた。サウルは、ずっとダビデを殺そうと試みていたので、ダビデは逃げ去って、ガト *Jat*¹²⁶の王アキシユ *Akhish*¹²⁷のもとに行った¹²⁸。アキシユはダビデを見て、彼がダビデだと悟った。それで、ダビデは彼に策を弄し¹²⁹、アキシユは彼を解放した¹³⁰。かれはサリク *Sāri*¹³¹に行き、そこに逗留した。サウルは、彼を逃してしまったことを知ると、神に仕える祭司たちを殺した。彼は言った。「おまえたちは彼が逃げたことを知っていたのに、私に知

¹¹⁹ 両写本では *asharr* となっているが (M: 11a; C: 14b)、刊本では *ashadd* と直されている。ここでは両写本に従った。

¹²⁰ このやりとりについて、ゴリアテの言葉は『旧約聖書』「サムエル記上」17章43節にあるが、ダビデの言葉は見当たらない。一方ヨセフスはダビデの言葉として「いや犬どころか、おまえなどは犬にも劣る畜生だ」と同様の言葉を伝えている (フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』(ちくま学芸文庫、1999年)第2巻、p. 169)。

¹²¹ 『旧約聖書』「サムエル記上」17章49-51節に対応。

¹²² マンチェスター写本では *li-makān* となっているが (M: 11a)、ケンブリッジ写本では *bi-makān* となっており (C: 14b)、刊本では後者に従い *bi-makān* と翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

¹²³ 両写本では *wa-baqqā-hu* となっているが (M: 11a; C: 14b)、刊本では *wa-nafā-hu* と直されている。ここでは両写本に従った。

¹²⁴ マンチェスター写本では *Maljūl* と (M: 11a)、ケンブリッジ写本では *Malhūl* となっているが (C: 14b)、刊本では *Mikhal* と直されている。ここでは刊本に従った。ただし『七十人訳聖書』「サムエル記上」ではメルコル、『ペシッタ』「サムエル記上」では *Malkeal* とされており、これらの読みの方がアラビア語写本の形には近い。

¹²⁵ 『旧約聖書』「サムエル記上」18章27節に対応。

¹²⁶ 両写本では *Māt* となっているが (M: 11a; C: 14b)、刊本では *Jāt* と直されている。ここでは刊本に従った。『七十人訳聖書』ではゲトとされる。

¹²⁷ 両写本では *Hūs* となっているが (M: 11a; C: 14b)、刊本では *Akhish* と直されている。ここでは刊本に従った。ただし『七十人訳聖書』では「アクース」、『ペシッタ』では *Akish* とされる。

¹²⁸ 『旧約聖書』「サムエル記上」21章11節に対応。

¹²⁹ 『旧約聖書』「サムエル記上」21章14節では、アキシユに対して恐れを抱いたダビデが、気が狂ったような振る舞いをして難を避けたことが語られている。

¹³⁰ 『旧約聖書』「サムエル記上」21章13-16節に対応。

¹³¹ 『旧約聖書』「サムエル記上」22章5節では「ハレトの森」となっているが、『七十人訳聖書』では「サリク *Sarich* の町」となっており、これに由来するものと考えられる。

らせなかった」と¹³²。

その後サウルはダビデを探しに行き、彼（の居場所）を探りあてた。それでダビデは洞窟に入った。サウルが洞窟のそばに行った時、用を足すために li-hājati-hi¹³³ そこに降り立って、洞窟の中に入った。彼はダビデがそこにいると知らなかったのである。ダビデは立ち上がって¹³⁴、隠れた。彼の配下の者たちが彼に言った。「ダビデよ、彼を殺すのです。神があなたにその機会を与えてくださったのです」と。彼は言った。「私はそのようなことをするべき者ではない」と¹³⁵。

預言者サムエルが死んだ。イスラエルの民は集まって、それを大いに悲しみ、30日間泣き叫んだ¹³⁶。

サウルは異教徒たちとの戦いに出かけた。彼らの間の戦いは激戦となり、イスラエルの民は敗れて、彼らの中から多くの人々が殺された。エッサイの子ダビデはユダの子孫である彼の民とともにアマレク人たちと戦っていた。イスラエルの民が皆、敗走してサウルから離れると、サウルと彼の息子たち（だけ）が [53] 戦うことになった¹³⁷。その後サウルは、彼の武器を運んでいた配下の一人に言った。「お前の剣を取れ、そして私をそれで殺せ。さもなくばこれらの割礼していない者たち al-qulf¹³⁸ が私を殺し、なぶりものにしろ¹³⁹」と。しかし彼はそうしなかった。それでサウルはその剣を取って立て、自らをその剣に投げ出して死んだ。彼の3人の息子たちは殺された¹⁴⁰。サウルの王位は40年間であった¹⁴¹。

¹³² 『旧約聖書』「サムエル記上」22章17節に対応。

¹³³ 『旧約聖書』「サムエル記上」24章4節の日本語訳では、「彼の両足を覆う」と直訳できるところを、「用を足す」としている。

¹³⁴ 『旧約聖書』「サムエル記上」24章5節では、ダビデの部下がダビデに言ったセリフの後に「そこでダビデは立ち上がり、サウルのマントの裾をこっそり切りとった」とあり、あるいはその箇所を反映しているかもしれない。

¹³⁵ 『旧約聖書』「サムエル記上」24章1-8節に対応。「サムエル記上」24章9節以降では、ダビデがサウルのもとへ出て行き、和解が行われるが、ヤアクービーのテキストにその記述はない。一方、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は、サウルがダビデを追跡して洞窟に至るが、神が蜘蛛に巣を張らせたために、その中にダビデはいないと判断し、サウルはそこから立ち去ったという伝承を伝えている (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 556)。

¹³⁶ 『旧約聖書』「サムエル記上」25章1節に対応。ただし30日間という期間についての言及はない。

¹³⁷ 『旧約聖書』「サムエル記上」31章2節に対応。

¹³⁸ 『旧約聖書』「サムエル記上・下」においては、割礼が義務となっているイスラエルの民に対して、ペリシテ人は軽蔑表現として「無割礼の者'arel」と呼ばれている (『旧約聖書Ⅱ歴史書』「補注 用語解説：無割礼の者」p. 17)。

¹³⁹ 両写本ではyal'abūnaとなっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本ではyal'abūと直されている。ここでは刊本に従った。

¹⁴⁰ 『旧約聖書』「サムエル記上」31章4-6節に対応。

¹⁴¹ 『旧約聖書』「サムエル記上」のサウルの死の場面の前後にはサウルの統治期間に関する記述はない。『旧約聖書』「サムエル記上」13章1節では「2年間イスラエルを治めた」とされている。ヨセフス『ユダヤ古代誌』ではサウルの死の直後の記述では40年間とする (フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』(ちくま学芸文庫、1999年)第2巻, p. 229) が、別の箇所では20年間という記述もある (同書、第3巻, p. 270)。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では、トラーの民によると40年間とされ (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 559)、マスウーディー『黄金の牧場』では20年間とされている (al-Mas'ūdī, *Murāj al-Dhahab*, vol. 1, p. 62)。

ダビデ

サウル、すなわちタールートが死んだ時、ダビデはアマレク人との戦いをやめて、ツィクラグ Saqlāgh¹⁴²へとやって来た¹⁴³。彼はそこに2日間留まった。その後、彼のもとにサウルの死の知らせが届いた。彼はそのために悲しみ、哀悼をあらわにした。そして、ダビデはユダの民の王となった¹⁴⁴。ダビデには、たくさんの妻がおり¹⁴⁵、彼の子供たちを産んでいた。彼の子供の中で最も年長者はアムノン Amnūn¹⁴⁶であり、彼の母親はアヒノアム Shītmūm¹⁴⁷であった。次男はアビガイル Arbīkhāyil¹⁴⁸から生まれた¹⁴⁹ダルヤ Dālūyā¹⁵⁰、三男はマアカ Mūkhā¹⁵¹から生まれたアブサロム Abāshalūm¹⁵²、四男はハギト Dahāt¹⁵³から生まれたアドニヤ Arniyā¹⁵⁴、五男はアビタル Abītal¹⁵⁵から生

¹⁴² 『旧約聖書』「サムエル記下」1章1節に対応。ツィクラグは『旧約聖書』のみに見られるカナンの中の町の一つ。サウルの時代にはペリシテ人の支配下にあったとされる。現在のイスラエル南部、ベエルシバの北北東17kmに位置するテル・エルクイーリフェに比定されている (H.J. Stoebe + 荒井章三「チクラグ」『旧約新約聖書大事典』)。

¹⁴³ 両写本では wa-atā となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では ilā となっている。ここでは両写本に従った。

¹⁴⁴ 『旧約聖書』「サムエル記下」2章4a節には、ヘブロンに「ユダヤの人々がやって来て、ダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とした」とあり、ユダの家の王と全イスラエルの王を区別している。なお2章11節では「ダビデがユダの家の王としてヘブロンにとどまった期間は、7年6ヶ月であった」とされている。

¹⁴⁵ タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではその数は99人とされている (al-Tabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 563–564)。

¹⁴⁶ 両写本では Amyūn となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Amnūn と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』ではアムノン、『ペシッタ』では Hamnōn となっている。

¹⁴⁷ この人物は『七十人訳聖書』ではアキオノム、『ペシッタ』では Ahīnu'am となっている。ネルデケによると、これはギリシャ語の χ がエジプトの発音では sh の音となり、それがアラビア文字への転写に反映されたものであるという (Th. Nöldeke, “Review: Ibn Wādih qui dicitur al-Ja'qubī historiae,” p. 154.)。

¹⁴⁸ この人物は『七十人訳聖書』ではアビガイア、『ペシッタ』では Abīgā となっている。

¹⁴⁹ 両写本では min となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では bun と直されている。ここでは両写本に従った。以下の三男から六男までも同様。

¹⁵⁰ 両写本では Dālūtā となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Dālūyā と直されている。ここでは刊本に従った。ただしヘブライ語聖書ではキルアブ、『七十人訳聖書』ではダルーイアとされる。『ペシッタ』では Keleb となっている。

¹⁵¹ 両写本では Mūhā となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Mūkhā と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』ではマアカ、『ペシッタ』では Ma'kā となっている。

¹⁵² 両写本では Anāshalūm となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Abāshalūm と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』ではアベッサローム、『ペシッタ』では Abīshalōm となっている。

¹⁵³ マンチェスター写本では Dahāb と (M: 11a)、ケンブリッジ写本では Dahān となっているが (C: 15a)、刊本では Dahāt と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、ヘブライ語聖書ではハギト、『七十人訳聖書』ではフェンギト、『ペシッタ』では Hagīt となっている。

¹⁵⁴ この人物はヘブライ語聖書ではアドニヤ、『七十人訳聖書』ではオルニヤとされる。『ペシッタ』では Adōniyā となっている。

¹⁵⁵ この人物は『七十人訳聖書』ではアビタル、『ペシッタ』では Afītlā となっている。

まれたシェファトヤSafāṭiyā¹⁵⁶、六男はエグラAghlā¹⁵⁷から生まれたナタンNātān¹⁵⁸であった。これらの6人は6人の妻から（それぞれ）生まれたのであった¹⁵⁹。サウルの娘ミカルは子を産まなかった。それで彼女はダビデから逃れてサウルの配下の者たちのもとへ向かった。

イスラエルの民の諸支族はダビデを王とすることで合意し、彼を王とした。彼は7年間ユダの民だけの王であったのだが、その後イスラエルの民の諸支族すべてが彼を王としたのである。それでダビデはシオン Šiyūn¹⁶⁰の町、すなわちエルサレム Bayt al-Maqdis¹⁶¹に居を定めた¹⁶²。彼はそこに住居を建て、妻たちを娶った。そして、彼が王位に就いた後、彼にシャムアSamūn¹⁶³、ショバブSūbāb¹⁶⁴、ナタンNūtān¹⁶⁵、[54]ソロモンSalāmān¹⁶⁶、イブハルYābār¹⁶⁷、エリシュアAlīshūs¹⁶⁸、ネフェゲ

¹⁵⁶ 両写本では Afāṭā となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Safāṭiyā と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、ヘブライ語聖書ではシェファトヤ、『七十人訳聖書』ではサバティアとされる。『ペシッタ』では Shefatyā となっている。

¹⁵⁷ 両写本では A'lā となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Aghlā と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』ではアイグラ、『ペシッタ』では Aglā となっている。

¹⁵⁸ 両写本では弁別点がなく نطن となっている (M: 11a; C: 15a)。『旧約聖書』「サムエル記下」3章5節ではイトレアムとされるが、ヤアクービーのテキストでは、後述されるように、預言者ナタンと同一視する伝承も伝えられている (L: I, 54)。『七十人訳聖書』ではイェテラアム、『ペシッタ』では Ītr'am となっている。

¹⁵⁹ 『旧約聖書』「サムエル記下」3章2-5節に対応。なお、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』やマスウーディー『黄金の牧場』にはダビデの息子たちの名を列挙する箇所は見当たらない。

¹⁶⁰ エルサレムの一区域の名称、あるいはエルサレム全市およびその住民を指す呼称。エブス人の町であった丘、すなわちエルサレム南東部にある丘の名称（『旧約聖書』「サムエル記下」5章7節）であったものが、ユダヤ教とキリスト教の伝承によって南西部の丘がダビデの町とみなされ、更にシオンと言われるようになった。(R. Bach + 和田幹男「シオン」『旧約新約聖書大事典』)

¹⁶¹ これ以前にはこの語を「聖なる家」と訳出してきたが、ダビデ期以降は明らかに現在のエルサレムを指すことになるため、以下ではエルサレムと訳出する。

¹⁶² 両写本では tanazzala となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では yanzilu と直されている。ここでは両写本に従った。なお、英訳の注釈でも、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ライデン版のグロッサリーを参照して、“domicilium transtulit” (居住地を移す) と解釈することを提示している (E: 310, n. 209; al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, Glossarium, p. DX)。

¹⁶³ ただし、『七十人訳聖書』ではサンムース、『ペシッタ』では Shumū'a となっている。

¹⁶⁴ マンチェスター写本では弁別点がなく سوب と、ケンブリッジ写本では Sūbāt سوبات となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Sūbāb と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』ではソーバブ、『ペシッタ』では Shobūb となっている。

¹⁶⁵ 両写本では نطن となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Nūtān と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』ではナタン、『ペシッタ』では Nathan となっている。

¹⁶⁶ これはダビデの子であるソロモン Sulaymān のことだが、ここでは表記が異なっている。『七十人訳聖書』ではサラーマン、『ペシッタ』では Shlīmōn となっている。

¹⁶⁷ マンチェスター写本では نطن と (M: 11a)、ケンブリッジ写本では نطن となっているが (C: 15a)、刊本では Yābār と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』では「エベアル」、『ペシッタ』では Yōkbar となっている。

¹⁶⁸ 両写本では Alishurs となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Alīshūs と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』では「エリスース」、『ペシッタ』では Alīshā となっている。

Nāfāq¹⁶⁹、ヤフィア Yāfiyā¹⁷⁰、エリシャマ Alīshamās¹⁷¹、エルヤダ Alsanāyā¹⁷²、エリフェルト Alīfalāt¹⁷³が生まれた。それでダビデの子供たちは多数となり、彼の王権は威厳あるものとなった¹⁷⁴。イスラエルの民は彼を大いに称えた。

異教徒たちはダビデがイスラエルの民の王となったというのを聞き、彼と戦うために¹⁷⁵集まった¹⁷⁶。ダビデは彼らと戦って大勢殺し、彼らを滅ぼしてしまった。そして戦いが終わったとき、車‘ajalに乗せて聖櫃をエルサレムの町に運び入れた¹⁷⁷。そしてイスラエルの民、その男女のために食事を作った¹⁷⁸。

その時代に預言者ナタン Nātān¹⁷⁹がいた。神はナタンに啓示を下した。「我が^{しもべ}僕ダビデに言え。『私のために家を建てよ ibni lī bayt^{an}¹⁸⁰。というのも、お前は羊の囲い¹⁸¹の中にいたが、その後私はお前をイスラエルの民の王とし、また私はお前の敵を殺したのだから』」と。それで預言者ナタンは

¹⁶⁹ 両写本では نفاق となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Nāfāq と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』では「ナフェク」、『ベシッタ』では Nefeg となっている。

¹⁷⁰ マンチェスター写本では يافيا と (M: 11a)、ケンブリッジ写本では يافيا となっているが (C: 15a)、刊本では Yāfiyā と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』では「イエフィエス」、『ベシッタ』では Yafiyā となっている。

¹⁷¹ 両写本では Alīshamās となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Alīshamās と直されている。『七十人訳聖書』では「エリサマ」、『ベシッタ』では Alīshamā となっている。

¹⁷² マンチェスター写本では السنا と (M: 11a)、ケンブリッジ写本では السنا となっているが (C: 15a)、刊本では Alsanāyā と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』では「エリダエ」、『ベシッタ』では Alīdā となっている。

¹⁷³ 両写本では Alīfalāt となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Alīfalāt と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『七十人訳聖書』では「エリファラト」、『ベシッタ』では Alīfelat となっている。

¹⁷⁴ 「サムエル記下」5章13-16節に対応。

¹⁷⁵ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では al-qitāla となっているが (C: 15a)、刊本では li-qitāl-hi と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には、li-qitāl-hi とあり (M: 11a)、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

¹⁷⁶ 両写本では fa-jtama‘ū となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では wa-jtama‘ū と直されている。ここでは両写本に従った。

¹⁷⁷ 『旧約聖書』「サムエル記下」6章3節に対応。

¹⁷⁸ 『旧約聖書』「サムエル記下」6章19節に対応。

¹⁷⁹ マンチェスター写本では ناتان と (M: 11a)、ケンブリッジ写本では ناتان となっているが (C: 15a)、刊本では Nātān と直されている。ここでは刊本に従った。以下も同様。

なお、ヤアクービーは後に異説をあげているものの、基本的には預言者ナタンをダビデの息子として挙げているナタンとは別人とみなしている。

¹⁸⁰ 『旧約聖書』「サムエル記下」7章5節では、ヤハウエの言葉は「お前はわたしのために、わたしが住む家を建てようというのか」とされており、ダビデによる家 (= 神殿) の建設を否定している。なお、『旧約聖書』「サムエル記下」7章12-13節では、ナタンは、ダビデの子孫が神の名のために家を建てるという神の言葉を伝えている。

¹⁸¹ 両写本では dayri-hi となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では šīra と直されている。ここでは刊本に従った。

ダビデに¹⁸² (そのように) 言った¹⁸³。ダビデはそれを重く受け止めた。また、ナタンはダビデの息子であったとも言われている¹⁸⁴。

ダビデは異教徒たちと戦って、彼らを破った。また、モアブの民 Mu'āb¹⁸⁵ と戦って彼らを破った。そして、ツォバ Sūbā¹⁸⁶ の王ハダドエゼル Adadāzār¹⁸⁷ と戦い、彼を破り、彼の戦車 markab¹⁸⁸ 1千台と馬7千頭¹⁸⁹を奪った。シリアとダマスカスの民はダビデと戦うためにハダドエゼルのもとに集まったが、ダビデは彼らのうち2万2千人を殺し、その地を支配した。シリアの民は皆、彼の奴隷となった¹⁹⁰。その後、彼らは皆ダビデとの戦いへと集まった。そこで彼は、姉妹の息子であるヨアブ Yu'āb¹⁹¹ とその兄弟アビシャイ Abīshā¹⁹² を彼らに派遣した¹⁹³。その後ダビデは出発してヨルダン川 nahr al-Urdunn を渡り、その民4万人を殺した。彼はその民の長であるショバク Ashān¹⁹⁴ を殺した。

その後、ダビデは姉妹の子ヨアブをアンモンの民との戦いのためにシリアの低地 asāfil al-Sha'm¹⁹⁵ へと送り、自身はエルサレムに帰った。(ある時) 彼が起き上がって自邸の屋上を歩いてい

¹⁸² 両写本では qāla Nātān li-Dāwūd al-Nabī となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では qāla Nātān al-Nabī li-Dāwūd と直されている。ここでは刊本に従った。

¹⁸³ 『旧約聖書』「サムエル記下」7章1-9節に対応。

¹⁸⁴ 預言者ナタンをダビデの息子とする記述は『旧約聖書』には見当たらない。

¹⁸⁵ 両写本では لب となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Mu'āb と直されている。ここでは刊本に従った。

¹⁸⁶ 両写本では سوبا となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では Sūbā と直されている。ここでは刊本に従った。ツォバはレバノン東部ベカー渓谷 (ベカー高原) に位置するアラム人の都市王国 (K.-H. Bernhardt + 菊地純子「ゾバ」『旧約新約聖書大事典』)。

ただし、『七十人訳聖書』では「サムエル記下」8章5節に「ダマスコスのスリア (の軍) がスーバの王ハドアラザル救援のためにやってきた」とあり、スリアがヘブライ語の「アラム」の訳語として用いられている。「サムエル記下」10章8節では「スリア・スーバ」という表現も用いられる。これが混用された可能性も考えられる。

¹⁸⁷ 両写本では Adarwān (M: 11a; C: 15a) となっているが、刊本では Adadāzār と直されている。ここでは刊本に従った。以下同様。『七十人訳聖書』ではハドアラザルとなっている。

¹⁸⁸ 『旧約聖書』「サムエル記下」8章3-4節に1千台の戦車とあることからそのように訳出した。

¹⁸⁹ 両写本では sab'at alf となっているが (M: 11a; C: 15a)、刊本では sab'at ālāf と直されている。ここでは刊本に従った。なお、『旧約聖書』「サムエル記下」8章4節では1千7百の騎兵と、『七十人訳聖書』では7千の騎兵とされている。『ベシッタ』では1千7百の騎兵となっている。

¹⁹⁰ 『旧約聖書』「サムエル記下」8章1-6節に対応。

¹⁹¹ 両写本では يواب となっているが (M: 11b; C: 15a)、刊本では Yu'āb と直されている。ここでは刊本に従った。以下も同様。

¹⁹² 両写本では ابشا となっているが (M: 11b; C: 15a)、刊本では Abīshā と直されている。ここでは刊本に従った。

¹⁹³ 『旧約聖書』「サムエル記下」10章7-10節に対応。

¹⁹⁴ 両写本では Ashān となっており (M: 11b; C: 15a)、刊本でも Ashān としているが、『旧約聖書』「サムエル記下」10章18節では「軍の長ショバク」とされている。『七十人訳聖書』では「ソーバク」、『ベシッタ』では Shōbach としている。ここでは明らかに同一の人物を指すものと考え、訳文ではショバクとした。

¹⁹⁵ 『旧約聖書』「サムエル記下」11章1節では、ラバという都市を包囲したとされる。ラバは現在のアンマンにあたる。

ると qāma yamshī¹⁹⁶、[55] エリアム Aliyāt の娘で、ヘト人 al-Hittī¹⁹⁷ であるハナンの子ウリヤ¹⁹⁸ Ūriyā b. Hanān al-Shaṭṭī の妻であったバト・シェバ Barsabā¹⁹⁹ を見た。彼が彼女について尋ねたところ、彼女の状況、すなわち彼女がハナンの子ウリヤの妻であるということについて知らされた。彼女が、彼の心の中に住み着いた。そこで彼はハナンの子ウリヤに使いを送って、彼のもとに来させた。そして彼は彼の姉妹の子であるヨアブへと、ウリヤを騎馬の前に出して戦わせるように書き送った。ヨアブはそうにした。それで彼は戦って殺された。ダビデはウリヤの妻に使いを送って、彼女と結婚し、身籠らせた²⁰⁰。

それで神は、彼の書において語っているように、彼に二人の天使を遣わした²⁰¹。また神はダビデのもとに預言者ナタンを遣わした。ナタンは彼に言った。「おおダビデよ。神はあなたに裁きにおいて公正に振る舞い、真実をもって裁定を下し、《欲望に従ってはならない》と命じなかったか？」と²⁰²。ダビデは言った。「もちろん命じました」と。ナタンは言った²⁰³。「さて、この二人は²⁰⁴、一つの

¹⁹⁶ ヤアクービーのテキストだけでは意味が取りにくい、『旧約聖書』「サムエル記下」11章2節「ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を散歩していたところ」という記述に対応するものとして訳出した。

¹⁹⁷ 両写本では al-Shaṭṭī となっており (M: 11b; C: 15a)、刊本でも al-Shaṭṭī としているが、英訳は『旧約聖書』「サムエル記下」11章3節の記述に従って、ヘト人 Hittite と訳出している (E: 312)。ここでは同様に解釈して訳出した。ネルデケは注147と同様の音の変化が起こった例としている (Th. Nöldeke, “Review: Ibn Wāḍih qui dicitur al-Ja‘qubī historiae,” p. 154)。

¹⁹⁸ マンチェスター写本では Ūriyā となっているが (M: 11b)、ケンブリッジ写本では Ūriyā となっており (C: 15b)、刊本では後者に従い Ūriyā と翻刻されている。ここではケンブリッジ写本と刊本に従った。以下も同様。なお、イブン・クタイバ『知識の書』でも Ūriyā b. Hanān とされている (Ibn Qutayba, *al-Ma‘ārif*, al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif, [1969] p. 46)。

¹⁹⁹ マンチェスター写本では برسā となっているが (M: 11b)、ケンブリッジ写本では弁別点のない برسā となっており (C: 15b)、刊本では Barsabā としている。ここでは刊本に従った。「サムエル記下」11章3節に対応しているが、英訳の注釈は、アラビア語の形はギリシア語の形「バールサベエ」bērsabee に近いと指摘する (E: 312, n. 218)。

²⁰⁰ 「サムエル記下」11章4-5節では、ダビデがバト・シェバを身籠らせたのは、ウリヤが死ぬ前であるとされている。

²⁰¹ この文言は『クルアーン』の中にこのように書かれていることを示すフレーズだが、実際には『クルアーン』では二人の天使を送り出したことは書かれていない。

²⁰² 『クルアーン』38章26節と内容的には同様であるが、最後の一文を除いて文言は異なる。このくぐりには『旧約聖書』「サムエル記下」には見られない。

²⁰³ 以下の物語の話者は、ヤアクービーや『旧約聖書』「サムエル記下」12章ではナタンであるとされているが、『クルアーン』38章24節では、これと類似する話が、兄弟間での羊をめぐる係争が実際にダビデのもとにもたらされたという逸話となっており、そこにナタンは登場しない。

²⁰⁴ 「この二人」は直前に言及されている二人の天使のことを指していると考えられる。『旧約聖書』「サムエル記下」や『クルアーン』には天使への言及は見られないが、おそらくは直前に登場した天使二人がナタンとともにやってきたということを言っているのであろう。一方、タバリー『諸王と諸預言者の歴史』では、天使二人が『クルアーン』に記されているような訴訟の係争者に身をやつてダビデの元を訪れたことになっており、ナタンは登場しない (al-Ṭabarī, *Ta’riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 564–566)。

町に住んでいるが、一人は裕福であり、一人は貧しい。裕福な者は多くの家畜²⁰⁵や雌牛を所有しているが、貧しい者は、彼が育てた小さな一匹の雌の子羊 rikhla しか持っていない。それは、彼や彼の子供たちとともに成長し、彼の食べ物の中から食べ、彼の杯から飲み、彼の膝で眠っていたのである。(ある時) 裕福な者のもとに客が滞在した。すると彼は自分の雌牛や羊からはなにも取らず、貧しい者の雌の子羊を取って、それを彼の客に饗した」と。ダビデは怒って言った。「彼には死刑が、またその雌の子羊の7倍²⁰⁶を償うのがふさわしい」と。預言者ナタンは言った。「あなたこそがそのようにした人間なのだ。まことにあなたの神である主はあなたに言っている。『お前は羊飼いであったが、その後私はお前をイスラエルの民に対する王とした。お前をサウルの手から救い、イスラエルの家とユダの家をお前に与えた。しかしお前はあのようなことをしたのである。私は、お前の最悪の子供によって、お前にならずや彼にお前とお前の妻たちを支配させる』」と。そしてダビデはそのことで大いに悲しんだ。するとナタンが彼に言った。「神はあなたの所業 sabil を許した。あなたは死なないだろう。しかし彼はあなたに対してあなたの子供たちの悪行をもってあなたに復讐する」と。また神は彼に、その女が彼に生んだ彼の息子は [56] 死ぬだろうと知らせた。

それでダビデは悲しみ、その悲しみはとても深いものとなった。彼の幼子は病気になった。その病²⁰⁷が重くなると、ダビデは断食をした。また、起き続けて、祈り、泣き、毛皮をまとして fil-sha'ar²⁰⁸ 地面に転がっていた。その幼子が死ぬと、ダビデの従者たちは、彼にそれを知らせるのは難しいと思った。その後、ダビデは彼らの囁きを聞いて、それを知った。すると彼は顔を洗い、服を着て、自分の居所で席に着いて、食べ物を求めた。そして彼は言った。「むしろ私は彼が死ぬ前の方が悲しかったのだ。今となっては、私が悲しんでも、彼はわたしのもとへ帰ってはこない。そうではなくて、私が彼のもとに行くことになるのだ」と。そしてダビデはバト・シェバ Barsabā²⁰⁹ と交わり、彼女は男の子を身籠った。そして彼はその子をソロモン Sulaymān²¹⁰ と名付けた²¹¹。

その後、ダビデの子アブサロム Abīshālūm²¹² は彼の兄アムノンを殺した。すなわち、アブサロム

²⁰⁵ 両写本では mawāshī となっているが (M: 11b; C: 15b)、刊本では mawāsh^m と直されている。ここでは刊本に従った。

²⁰⁶ 『旧約聖書』「サムエル記下」12章6節では「4倍」とされている。一方、『七十人訳聖書』では7倍とされている。

²⁰⁷ 両写本では 'alay-hi となっているが (M: 11b; C: 15b)、刊本では 'illat-hu と直されている。ここでは刊本に従った。

²⁰⁸ マンチェスター写本では fil-sha'ar となっているが (M: 11b)、ケンブリッジ写本では bil-sha'ar となっており (C: 15b)、刊本でも後者に従い bil-sha'ar と翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。なお、『旧約聖書』「サムエル記下」12章16節では「一晚中、地に伏していた」とされているが、『七十人訳聖書』では「粗布をまとして地の上で眠った」とされている。

²⁰⁹ 両写本では Barsanā となっているが (M: 11b; C: 15b)、刊本では Barsabā と直されている。ここでは刊本に従った。

²¹⁰ すでにダビデの子たちが列挙される部分でソロモンの名前は出ているが、そこでは Salāmān とされている。この部分での表記はアラビア語でソロモンを表す際の一般的な表記となっている。

²¹¹ 以上の一段は『旧約聖書』「サムエル記下」12章1-24節に対応。

²¹² 両写本では Ishālūm となっているが (M: 11b; C: 15b)、刊本では Abīshālūm と直されている。ここでは刊本に従った。

は彼の同母の妹のことでアムノンを糾弾し、殺したのであった²¹³。それで彼はダビデに対して反乱を起こした。アブサロムは見事な体をしており、髪の毛が多かった²¹⁴。ダビデは彼に対して、彼を連れ戻す者を送ったので、彼は帰ってきた²¹⁵。その後、アブサロムはダビデに対して再び反乱を起こした²¹⁶。ダビデは自らの両足で歩いて彼から逃げ出し、シナイ山²¹⁷の山道を登って行った。彼が飢えに襲われたところ、パンと油を携えた一人の男が彼のもとに加わったので、彼はそれを食べた²¹⁸。

アブサロムは彼の父の町（エルサレム）に入り、その家に向かった。彼は父の側女たち sarārī を捕らえ、彼女たちと交わった。彼は言った。「神が私をイスラエルの民の王としたのだ」と。そして彼は1万2千人（の兵）を率いて出発し、ダビデを殺そうとして探した。しかし、ダビデは逃げて、ヨルダン川を渡った。彼が川を渡ると、彼のもとに彼の配下の一団と、村々から来た群衆が集まった。彼は[姉妹の]子²¹⁹ヨアブをアブサロムと戦わせるために送り出した。ダビデは彼に「私のために彼を傷つけず、生け捕りにせよ」と言った。彼らは出発し、彼と戦った。アブサロムはラバに乗っていた。彼はテレビンの木 shajarat buṭum²²⁰の下に入った。すると彼はそこに吊るされ、彼の首は折れてしまった。ヨアブは彼に3本の矢を射て、穴の中に彼を投げ入れた²²¹。ダビデのもとにそ

²¹³ 『旧約聖書』「サムエル記下」13章1-29節においては、アブサロムは、彼の異母妹タマルを辱めたアムノンに対して、ダビデが長子であるアムノンを処罰しなかったため、復讐を企て、配下の者たちに殺害させたと言われる。

²¹⁴ 『旧約聖書』「サムエル記下」14章26節にアブサロムの髪の毛の豊かさについての記述があり、「王の重りで200シェケルもあった」とされる。

²¹⁵ 両写本では waqa'a となっているが (M: 11b; C: 15b)、刊本では raja'a と直されている。『旧約聖書』「サムエル記下」14章23節によると、アブサロムは一度出奔して、一度帰還している。それを踏まえ、ここでは刊本に従った。

²¹⁶ 両写本では kharaja ilay-hi となっているが (M: 11b; C: 15b)、刊本では kharaja 'alay-hi と直されている。『旧約聖書』「サムエル記下」15章によると、アブサロムは4年をかけてエルサレムで自分の勢力を浸透させたため、それに気づいたダビデがことが起こる前に逃亡したとされる。それを踏まえ、ここでは刊本に従った。

²¹⁷ 『旧約聖書』「サムエル記下」15章30節によると、ダビデが登ったのはオリーブ山とされる。

²¹⁸ 『旧約聖書』「サムエル記下」16章1節によると、その男はメフィボシェトの従者ツイバであり、「パン200個、干し葡萄100房、夏の果物100個、葡萄酒1袋」を一對のろばに載せてきたという。またダビデがそれを食べたという記述はない。

²¹⁹ マンチェスター写本では欄外に walad-hu が付け足されており (M: 11b)、ケンブリッジ写本ではマンチェスター写本の欄外に付け足された walad-hu を本文として採用している (C: 15b)。刊本はケンブリッジ写本に従って walad-hu としている。しかし、ヨアブはダビデの子ではなく甥にあたる。英訳は写本本文にないことから単純に削除としている (E: 313, n. 223)。ここではヨアブに関するヤアクービーの前の記述 (L: I, 54, 55) と一致するように、「姉妹の」を補った。

²²⁰ ウルシ科の高木で落葉樹。『旧約聖書』においては大きな木、そして時には聖なる木として言及され、その下でしばしば重要な事件が起こっている。このアブサロムの死のほかにも、上述のダビデとゴリアテの一騎打ちも「テレビンの木の谷」と呼ばれる場所で行われたとされる (J. Feliks+ 琢磨清「テレビンの木」『旧約新約聖書大事典』)。

²²¹ この一段は『旧約聖書』「サムエル記下」18章9-17節に対応。そこでは、アブサロムの長い髪が災いして偶然木にひっかかり、吊るされてしまったとされる。

の知らせが届くと、彼は²²²痛切に悲しんだ。そしてダビデは自らの地（エルサレム）に戻った²²³。

[57] その後に、アズラーAzlā²²⁴が巨人たちとともに、ダビデに対して反乱を起こした。ダビデは彼らと戦い、彼らを殺した。ダビデが彼らを殺して、神が彼らからダビデを救ったとき、彼は神の栄光を称え、神を称賛した。そして彼は神の栄光を称えて言った²²⁵。

「あなたにこそ、おお主よ、私は僕として仕えるa‘budu²²⁶。そして私はあなたを愛する。あなたこそ私の力。あなたは私の備え、私の避難所、私を救い出す者。死の苦痛が私を取り囲み、私に近づき、死の不運が私を飲み込んだ後に、私は私の困窮の中であなたに祈り、助けを求めた²²⁷。おお私の神よ。あなたは私の声を聞いて、私に立ちはだかつて抑圧した者たちから私を救い出した。あなたは私の助け手だった。というのもあなたが私を困窮から安息²²⁸へと救い出したからである。あなたはなんと公正なことか、主よ。あなたは、あなたに委ねる者たちにとって、なんと大きな助けになることか。というのもあなた以外に主はいないからである。その力を私の中に呼び起こせ²²⁹。私に導きの道を見せよ。あなたの前に私の両足を固定せよ。私の両手を鍛えよ。私の敵たちに私に対抗する力を与えるな。私にイスラエルの民の服従を与えよ。彼らを奴隷khwālとして従わせよ。あなたへの感謝を私の中に呼び起こせ」と²³⁰。

ダビデが、神をこのような言葉で称賛したときには、彼の声は似たようなものを聞いたことがないような良い声であった。彼は『詩篇 *al-Zabūr*』²³¹を詠み、以下のように言った。

²²² 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *ilay-hi* となっているが (C: 15b)、刊本では *‘alay-hi* と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には、*‘alay-hi* とあり (M: 11b)、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

²²³ この一段は『旧約聖書』「サムエル記下」20章3節「ダビデはエルサレムの王宮に戻った」に対応したものか。

²²⁴ 不明。英訳は『旧約聖書』「サムエル記下」17章29節にてダビデに食べ物を運んだバルジライと混乱したものかもしれないとし、反乱の指導者としては『旧約聖書』「サムエル記下」20章1節で言及されるシェバを挙げている (E: 313, n. 225)。

²²⁵ 以下は『旧約聖書』「サムエル記下」22章と「詩篇」18章の両者に見られる記述であるが、次の一段で言及されているような「詩篇」への言及は見られない。

²²⁶ この「僕」に類する言葉は『旧約聖書』「詩篇」18章1節にはあるが、『旧約聖書』「サムエル記下」22章には見られない。

²²⁷ マンチェスター写本では *wa-sta‘that* と (M: 12a)、ケンブリッジ写本では *wa-sta‘Yth* となっているが (C: 16a)、刊本では *ista‘antu* と直されている。ここでは刊本に従った。

²²⁸ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *al-fariḥ* となっているが (C: 16a)、刊本では *al-faraj* と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には *al-faraj* とあり (M: 12a)、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

²²⁹ 『旧約聖書』「詩篇」18章33節「この神こそ私に力を帯びさせる方」に対応。

²³⁰ この一段の祈りの内容は『旧約聖書』「サムエル記下」22章および『旧約聖書』「詩篇」18章に対応。

²³¹ 『旧約聖書』に採録された文書の一つであり、マソラ本文では150篇の詩歌をまとめたもの（ただし『七十人訳聖書』や『ベシッタ』では151番目の詩が収録されている。注265参照）。イスラームの文脈では、『クルアーン』4章163節、17章55節にも「ダーワードに詩篇を授けた」と言及され、モーセに授けられたトーラーに次いで、ダビデに授けられた啓典と位置付けられている (E. Schnutenhaus + 村岡崇光「詩篇」『旧約新約聖書大事典』; 小田淑子「詩篇」『岩波イスラーム事典』)。

「罪人たちの道を進まず、嘲笑者たちの座に加わらず、そうではなくて²³²、神の（定めた）慣習 sunnat Allāh²³³を愛し、彼の慣習を bi-sunnati-hi²³⁴夜も昼も学んだ²³⁵人²³⁶に祝福あれ tūbā。彼は水辺に茂り、その時々の実をつけ、葉が散らない木のごとくである。心を偽る者たちは裁定において、また過ちをなす者たちは信仰篤き者たちの集まりにおいて、そのような者ではなかった。それは神が、信仰篤き者たちの道を知っているためだ²³⁷。罪人たちの道は無効である」と²³⁸。

その後、彼は言う。

「天にいる者よ、神を²³⁹賞讃せよ。すなわち、高いところにいる者は彼を賞讃し、彼の天使たちは皆彼を賞讃し、彼の軍団は [58] 皆彼を賞讃し、太陽と月は彼を賞讃し、天体と光²⁴⁰は彼を賞讃し、天の上にある水²⁴¹は我らが主の名を賞讃するのだ。それは、彼があらゆるものに対して、『在れ』と言ったので、それが存在するようになったことによってである²⁴²。すなわち、《彼が万物を創造し》²⁴³、造り出したのである。彼は、それらを無窮の永遠なるものとした。彼はそれらのすべてに定めを与え²⁴⁴、それらに越えられない限界と終わりを定めた。地にいる者よ、神を賞讃せよ。すなわ

²³² 両写本では la-yakun となっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本では lākin と直されている。ここでは刊本に従った。

²³³ 『旧約聖書』「詩篇」1章2節ではこの部分は「律法」とされている。アラビア語の sunna は一般的に「慣習」、特にハディースによって伝えられ、イスラーム法の法源となる「預言者ムハンマドの慣習」を指すことが多いが、『クルアーン』には「神の慣習」という用法も見られ (33章38節、33章62節、35章43節、40章85節、48章23節)、そこでは「神によって定められた慣習」という意味で用いられている。なお、『ペシッタ』ではこの語は nāmūse とされている。

²³⁴ 両写本では bi-sunnatⁱ-hi となっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本では bi-sunanⁱ-hi と直されている。ここでは両写本に従った。

²³⁵ 両写本では علم と弁別点がないが (M: 12a; C: 16a)、刊本では刊本 ta'allama と直されている。ここでは文脈から ya'lamu と解釈した。

²³⁶ 刊本では、『旧約聖書』「詩篇」1章1節にある文言がないことから、この部分に空白があると示されているが、両写本では空白なしにつながっている (M: 12a; C: 16a)。ここでは両写本に従い、空白を想定せずに訳出した。

²³⁷ 両写本では wa-min ajl anna Allāh ya'lam となっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本では冒頭の wa を落としている。ここでは刊本に従った。

²³⁸ この一段の祈りの内容は『旧約聖書』「詩篇」1章に対応。

²³⁹ マンチェスター写本では Allāh となっているが (M: 12a)、ケンブリッジ写本と刊本は lillāh となっており (C: 16a)、刊本でも後者に従い lillāh と翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

²⁴⁰ 『旧約聖書』「詩篇」148章3節では「光の星たち」、『七十人訳聖書』および『ペシッタ』では「星と光」とされている。

²⁴¹ 『旧約聖書』「詩篇」148章4節では「かれを讃美せよ、諸天の天よ、天の上なる水よ」とされている。これはバビロニアの宇宙観に基づくものであり、『旧約聖書』の中に現れる世界観の一つであり、大空としての天 (諸天) が、天にあるカオスの水を分離していると考えているものとされる (D. Michel+ 柴田有「世界観」『旧約新約聖書大事典』)。

²⁴² 英訳の注釈では、ここで用いられている kun fa-kāna は『クルアーン』に登場する kun fa-yakūnu という表現 (2章117節、3章47節、3章59節、6章73節、16章40節、19章35節、36章82節、40章68節) に類似すると指摘している (E: 315, n. 229)。

²⁴³ 『クルアーン』25章2節。

²⁴⁴ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では taqdir^m となっているが (C: 16a)、刊本では taqdīr^m と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には taqdīr^m (M: 12a) とあり、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。なお、『クルアーン』25章2節には、qaddara-hu taqdīr^m とあり、中田訳では「応分を定めた」と訳されている。

ち、火と電と雪と氷²⁴⁵は(賞賛するのだ)。そして彼は、彼の言葉で猛烈に吹く風を創造した²⁴⁶。

忠実な者たちの礼拝所 masjid²⁴⁷において神を新たな賞賛(の歌)で賞讃せよ。イスラエル(の人々)は彼の創造者を喜べ。まことにシオン[の民]²⁴⁸は、あなたがたの主の偉大さを讃えよ。その者が持つタンバリン²⁴⁹と太鼓と手鼓 kabar²⁵⁰で彼の名を賞讃せよ²⁵¹。それは、神が彼の法 sharī'a(に従う者たち)に満足し²⁵²、困窮者たちに助けを与えるからだ。忠実な者たちはその寛容さを賞賛せよ。また、彼らの寝台の上で賞賛せよ。彼らの喉²⁵³で神の偉大さを讃えよ。彼らは両刃の剣を²⁵⁴手に、諸集団 shu'ūbに勝利し、様々な民 umamに警告を与えよ²⁵⁵。彼らの王たちを枷で、高貴なるものたちを鉄の鎖で固定せよ。既に書かれた²⁵⁶裁定が彼らになされるように。すべての忠実な者たち

²⁴⁵ マンチェスター写本では欄外の修正として والله とし (M: 12a)、ケンブリッジ写本では行間に والله を挿入しているが (C: 16a)、刊本では修正前の al-jalīd を採用している。ここでは刊本に従った。なお、ヘブライ語聖書の『旧約聖書』「詩篇」148章8節では「煙」、『七十人訳聖書』では「氷」とする。また『ベシッタ』では「霜 glīdā」としている。

²⁴⁶ 『旧約聖書』「詩篇」148章1-8節に対応。その後は省略されている。

²⁴⁷ 『旧約聖書』「詩篇」149章1節では「集会」としているが、アラビア語の masjid は「跪拝する場所」の意であり、一般にイスラームの信徒が集まって礼拝をするモスクを表す。ここではヤアクービーがイスラーム的な用語を取り入れたものと考え、「礼拝所」と訳出した。

²⁴⁸ 両写本には banī の語はなく (M: 12a; C: 16a)、刊本が補ったものである。『旧約聖書』「詩篇」149章2節では「シオンの子ら」とする。ここでは刊本に従って補った上で訳出した。

²⁴⁹ 『旧約聖書』「詩篇」149章3節では「踊り」とされており、『七十人訳聖書』も同様であるが、『ベシッタ』では「タンバリン qlgā」とする。

²⁵⁰ 『旧約聖書』「詩篇」149章3節では「手鼓と琴」とされている。ヘブライ語では kinnōr、『七十人訳聖書』では kithara となる。アラビア語の kabar では適当な意味に行きあたらないが、ハヴァヤスタインガスの辞書では drum という訳語も当てられている (J.G. Hava, *Arabic English Dictionary for Advanced Learners*, New Delhi: Goodword Book, 2007, p. 641; F. Steingass, *A Learner's Arabic-English Dictionary*, New Delhi: Gaurav Publishing House, 1993, p. 871)。なお、『ベシッタ』では kenarē で称賛するとあり、これは琴を指す。あるいはアラビア語の kabar 𐤁𐤏𐤃 はシリア語の音をアラビア語に音写したものの 𐤁𐤏𐤃 に、弁別点の混乱が起きたものかもしれない。

²⁵¹ 両写本では bil-kabar yakūnu lahu となっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本では al-kabar yukabbirūna となっている。ここでは両写本に従った。

²⁵² 両写本及び刊本では bi-sharī'ati-hi となっているが、刊本の校訂者は注において『旧約聖書』「詩篇」149章4節「なぜならヤハウエはおのが民を顧みる方」に準じて bi-sha'bi-hi という読みを提案しており、「神が彼の民を喜び」という訳もとりうる。ここでは両写本に従ったが、『旧約聖書』の文脈に応じて、「(に従う者たち)」と補って訳出した。

²⁵³ マンチェスター写本では ḥājir-hum と (M: 12a)、ケンブリッジ写本では ḥāḥir-hum となっているが (C: 16a)、刊本では ḥanājir-hum と直されている。ここでは、『旧約聖書』「詩篇」149章6節との整合性から、刊本に従った。

²⁵⁴ 両写本では bi-sayf となっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本では wa-sayf と直されている。ここでは刊本に従った。

²⁵⁵ 両写本では wa-tat'ātu としているが (M: 12a; C: 16a)、刊本では wa-yatta'izu と直されている。『旧約聖書』「詩篇」149章6節では「処罰を行う」となっている。ここでは刊本に従った。

²⁵⁶ マンチェスター写本では qad kutiba となっているが (M: 12a)、ケンブリッジ写本では kutiba となっており (C: 16a)、刊本もこれに従って kutiba としている。ここではマンチェスター写本に従った。単に書かれた裁定ではなく、「既に」と過去に完了していることが示されていることから、これがモーセに下された『律法』を指していると解釈される。

に、神への讃えがありますように²⁵⁷。

彼の聖所において彼を賞賛せよ。彼の威光たる天において彼を賞賛せよ。彼の力と強さについて彼を賞賛せよ。彼の偉大さについて²⁵⁸彼を賞賛せよ。絃楽‘azf²⁵⁹の音で彼を賞賛せよ。豎琴qītārと手鼓²⁶⁰で彼を賞賛せよ。リュートと管楽器²⁶¹で彼を賞賛せよ。長大で威厳を備えた²⁶²弦楽器awtārで彼を賞賛せよ。響き渡る金属音ṣalāsīl al-sama‘で彼を賞賛せよ。いと高き音と [59] 叫びで彼を賞賛せよ。息があるもの皆がkull nafs bi-nafas清らかに我らが主を²⁶³大いに賞賛せよ²⁶⁴」と。

そしてダビデは『詩篇』の最後で以下のように言っている²⁶⁵。

「まことに私は私の兄弟の末であり、私の父の家の僕であった。私は、父の羊の世話をしており、私の手は手鼓²⁶⁶を打ち、私の指は横笛を奏でていた。私のことを我が主に語った者は誰か？ 彼は我が主である。彼は私から聞き、私へと彼の天使たちを遣わした²⁶⁷者である。彼は、私の兄たちの羊から私を引き離れた²⁶⁸。彼らは私より年長で優れていたが、我が主は彼らに満足しなかったのである。彼はゴリヤテの軍との戦いのために、私を召命した。ゴリヤテが偶像を崇拜するのを私が見

²⁵⁷ 『旧約聖書』「詩篇」149章1-9節に対応。

²⁵⁸ 両写本ではli-‘atmati-hiとなっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本ではbi-‘azmati-hiと直されている。ここでは刊本に従った。

²⁵⁹ 両写本ではal-‘arfとなっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本ではal-‘azfと直されている。ここでは刊本に従った。『旧約聖書』「詩篇」150章3節では「角笛」とされる。ドズイーによると、‘azūfが「口笛のような、ピーピーなる音」、mi‘zafaが「豎琴」の意であるという (Dozy, *Supplément aux dictionnaires arabes*, Beirut: Librairie du Liban, 1968, vol. 2, p. 125)。ハヴァは「風の吹く音、複雑な音、音楽」 (J.G. Hava, *Arabic English Dictionary for Advanced Learners*, p. 470)、スタインガスは「弦楽器」 (F. Steingass, *A Learner's Arabic-English Dictionary*, p. 692) という訳語を載せているが、アラビア語のアズフには特別に角笛のようなものを表す語彙は見当たらない。また、ドズイーは‘arfにも楽器の一種という意味があるとしている (Dozy, *Supplément*, vol. 2, p. 116)。

²⁶⁰ 本訳注の注250を参照。『旧約聖書』「詩篇」150章3節では「琴」とされている。

²⁶¹ 両写本ではal-zamīrとなっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本ではal-zamirと直されている。ここでは刊本に従った。

²⁶² 両写本ではbil-awtār al-kabar al-ṭawīl al-ḥalīlātとなっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本ではbil-awtār wal-kabar al-ṭawīl al-ḥalīlātと直されている。両写本のテキストも刊本のテキストも文法的に意味が通る文章とはならない。ここでは文法的に完全ではないが、bil-awtār al-kabīr al-ṭawīl al-ḥalīlātと読んで訳出した。

²⁶³ 両写本ではli-rabbī-nāとなっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本ではrabbī-nāと直されている。ここでは両写本に従った。

²⁶⁴ 『旧約聖書』「詩篇」150章1-6節に対応。

²⁶⁵ 以下はマソラ本文テキストの詩篇に含まれておらず、外典とされるが、『七十人訳聖書』と『ペシッタ』には151章として含まれる。以下、松田伊作「詩篇151」『オリエント』9-4 (1967), pp. 15-30を参照。

²⁶⁶ 両写本ではkabā‘ir کبايرとなっているが (M: 12a; C: 16a)、刊本ではkabarと直されている。本訳注の注250を参照。なお、英訳ではdrum (E: 316) としている。

²⁶⁷ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本ではwa-asalaとなっているが (C: 16a)、刊本ではwa-arsalaと直されている。当該箇所はマンチェスター写本にはwa-arsalaとあり (M: 12a)、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

²⁶⁸ マンチェスター写本ではfa-ntaza‘a-nīとなっているが (M: 12a)、ケンブリッジ写本ではfa-anza‘a-nīとなっており (C: 16a)、刊本でも後者に従いfa-anza‘a-nīと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

たとき、神は私にゴリヤテに対抗する助けを与えた。それで私はゴリヤテの剣をとって、その首を刎ねたのである」と²⁶⁹。

その後、イスラエルの民はダビデを誹謗した。それで神は彼らに対して怒りを強くした。神はダビデにイスラエルの民の数を数えるように命じた。それでダビデは彼らの数を数えた。すると80万人の兵士がいるとわかった。一方、ユダの民の（兵士の）数は50万人であった。神は預言者ヒラム Hīrām²⁷⁰をダビデに遣わした。神はヒラムに言った。「ダビデにこのように言え。三つの中から一つを選べ。7年にわたる飢饉がよいか。あなたが敵に差し出され²⁷¹、3ヶ月の間彼らがあなたを圧倒し、あなたの権力 *sultān* をあなたから奪うのがよいか。3日の間に過酷な死がもたらされるのがよいか」と。ダビデはそれについて²⁷² 思い悩んだ。彼は言った。「我が主は彼の創造物よりも私たちにに関して（判断するのに）ふさわしい」と²⁷³。神は彼らに（過酷な）死を課した。それで1時間のうちに7万人が死んだ。するとダビデは言った。「おお主よ。まことに私は悪を為した。羊 *bahā'im* に似たこれらの者たちの罪はなにか？」と。神は彼に「イエブス人 *al-Yabūsānī*²⁷⁴ の脱穀場に、私のために神殿を建てよ」と啓示した。ダビデはその山に登り、その脱穀場を50イスター *istār*²⁷⁵ で購入した。彼はここに犠牲の場所を建設した。それで神はイスラエルの民に死を与えるのをやめた²⁷⁶。

²⁶⁹ ダビデとゴリヤテの逸話については、本訳注の中でも言及されているが、ここではゴリヤテは「星辰信仰者」の一人として言及されている (L: I, 51–52)。

²⁷⁰ 『旧約聖書』「サムエル記下」24章11節では、ダビデに神の言葉を伝えた預言者はガドという名である (E: 317, n. 235)。Hīrām が名前の取り違えなのか、列王記に出てくる同名の人物をこの役割に当てているのかは不明である。

²⁷¹ マンチェスター写本では *بئع* と弁別点が打たれていないが (M: 12a)、ケンブリッジ写本では *yudfa'u* *بئع* となっており (C: 16b)、刊本では *tudfa'u* と直されている。ここでは文脈から判断して刊本に従った。

²⁷² 両写本では *bi-dhālika* となっているが (M: 12a; C: 16b)、刊本では *li-dhālika* と直されている。ここでは両写本に従った。

²⁷³ 『旧約聖書』「サムエル記下」24章14節では、ダビデは「われわれをヤハウエの手に陥らせよ。彼の憐れみは大きいからだ。わしを人の手に陥らせるな」としている。

²⁷⁴ 両写本では *al-Bāniyāsī* となっているが (M: 12b; C: 16b)、刊本では *al-Yabūsānī* と直されている。ここでは刊本に従った。『旧約聖書』「サムエル記下」24章18節では「イエブス人アウラナの麦打ち場」としている。イエブス人はカナン先住民の一つで、ダビデが征服した時のエルサレムの住民であった (G. Molin + 石田友雄「エブス」『旧約新約聖書大事典』)。

²⁷⁵ 両写本では *astākḥ^m* となっているが (M: 12b; C: 16b)、刊本では *istār^m* と直されている。ここでは刊本に従った。イスターはギリシア語の *Stater* に由来する重量単位で、約20gに相当する (W. Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, Leiden: E.J. Brill, 1955, p. 15.)。『旧約聖書』「サムエル記下」24章24節では、銀50シケルとしている。

²⁷⁶ 『旧約聖書』「サムエル記下」24章1–25節に対応。

[60] ダビデは年老いて、彼の体は弱ってしまっていた。彼にはアドニヤ²⁷⁷という息子がおり、彼はダビデの軍の長 *ṣāhib ḥurūb* であるヨアブ²⁷⁸とダビデの指揮官たちの一団²⁷⁹の好意を得ていた。彼は彼らに言った。「ダビデ王はすでに年老いた。私こそが彼の地位に就くのにふさわしい」と。その報がダビデのもとに届くと、彼は祭司ツァドク *Sādūq* と預言者ナタンのもとへと使者を送って、彼らに言った。「王国の人々を集めよ。私の息子ソロモンを私の雌ラバに乗せて運べ。そして彼を私の説教壇 *minbar*²⁸⁰に座らせよ。神が彼をイスラエルの民の長としたのだ。神は彼の王権を偉大なものとし、彼の地位を高くしたのだ」と。彼らはソロモンとともに出発し、ソロモンはダビデの説教壇に上がった。そして王国²⁸¹の人々が彼のもとに集まった。ダビデは言った。「かくのごとく神が私に私の息子ソロモンが王となることを知らせた。私の両目は（今）それを見ている」と。ソロモンはそのとき12歳であった²⁸²。その後ダビデの病気が重くなったので、彼はソロモンに次のように言い遣した。「私はあらゆる地上の民が辿る道を歩んでいる²⁸³。あなたの神である主の指示を行え。アムラムの子モーセに下された『律法』のなかにある彼の取り決め *mawāthiq* と契約 *'uhūd* と指示 *waṣāyā* を守れ」と。ダビデは死んだ。120歳であった²⁸⁴。彼の王位は40年間であった²⁸⁵。

²⁷⁷ 両写本では *Dūniyās* となっているが (M: 12b; C: 16b)、刊本では *Adūniyās* と直されている。ここでは刊本に従った。

²⁷⁸ 両写本では *li-Yu'āb* となっているが (M: 12b; C: 16b)、刊本では *Yu'āb* と直されている。ここでは刊本に従った。

²⁷⁹ 両写本では *qawmun* となっているが (M: 12b; C: 16b)、刊本では *qawman* と直されている。ここでは刊本に従った。

²⁸⁰ イスラームの文脈ではモスクにおいてメッカの方向を示すミフラーブの横に配置される説教壇を指す (羽田正「ミフラーブ」『岩波イスラーム辞典』)。

²⁸¹ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *al-malaka* となっているが (C: 16b)、刊本では *mamlaka* と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には *mamlaka* (M: 12b) とあり、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

²⁸² 『旧約聖書』「列王記」にはソロモンの年齢に関する記述はないが、『七十人訳聖書』「列王記」2章12節では彼が王位に就いたのは12歳の時であったとされている。

²⁸³ マンチェスター写本では、本文テキストでこの文の末尾を *kull ahl al-īmān* كل أهل الإيمان としているが、欄外において *al-ard* الأرض と修正が加えられている (M: 12b)。ケンブリッジ写本では、同様に *kull ahl al-īmān* と書いたのち、やはり行間において *al-ard* と修正が加えられている (C: 16b)。刊本では *kull ahl al-ard lā tam'an* كل أهل الأرض لا تمان として読んでいるが、写本の修正は、単純な置き換えであると考え、ここでは *kull ahl al-ard* كل أهل الأرض のみを本文テキストとして採用した。

²⁸⁴ 『旧約聖書』「列王記」2章のダビデの死の場面では、彼の年齢は記されていない。『旧約聖書』「サムエル記下」5章4節では、王になった時30歳であり、その後40年間治めたとしている。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では、預言者の伝承としてダビデの生涯を100年とする説と、啓典の民の伝えるものとして77年の生涯のうち40年間治めたという説を挙げている (al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 572)。

²⁸⁵ 『旧約聖書』「列王記」2章11節でも40年とされている。